ㅋ2ㄴ68

913.52H331a

帝国図書館蔵

序

扶桑歴代の勇士君父の仇を報したる事幾多ぞや就中曾我兄弟が美名卓然として人の耳目をれどろかす近き頃聞傳へ見及びたる女非人の風情やつれ姿ハ孤包の重代拔指のよひ狂言の仕ぐみ町中の評判に思ひ付たる五卷を筆のゆくに

国立国会図書館
29. 7.22

337619

まかせて女非人綴錦といふ讀物といへ
ゝぬ

寛保二みづのへ
戌のむつ春

作者　八文字屋自笑
同　其笑

女非人綴錦目錄

一之巻

○勸學院の雀を眞似る王城の畫鳶
簑毛を立てあらそふ聞取法問姿に似合ぬ心とことばは栴檀の二葉香しひ夫婦が出生
○壹富士二鷹三拾兩といへ夢ではないか
四相を悟る吟味の役のせて行駕籠の中は身の重ひ大名知略をえらぬ胸の中へ屠所の歩
○番ひ離て鳴へ四條の川千鳥
底を見ぬく春藤が鹽辛目ゐひてゝる駕籠の外は見知のない屋敷の内夢みた樣子一國の城主

二之巻

○欲と惡と思ひ合た主從の契約

國に貪る逆意の下工拵ひた奉公人は知見の有顔ぬきかけた刀の鯉口打和らひた家老の詞は始末の治り

○ざん颯と響渡る奥座敷の酒盛
　絲組の使者は國風の片わげ色のある柳腰は折目正しき長口上いひ掛た難題に身を果す老人の最期

○兄の心ハ悪に塊た悪金買
　世を渡る營ハ打たり吹たり數の指南手のまはらぬ身躰痩子に癖の病人は藥も利ぬ五十兩の借錢

三之巻

○旱魃の雨乞降て湧た四拾兩の小判
　子で子にあらぬ親子の中は義理に詰たいひ開き夫の知略は奥ふかひ納戸の内目のさめる金の出所

○欲に目のなひ盗人探當る妹の意見
　眞綿に包む針の先折て歸る思案の門口ひゞき渡る鼠の音は丑みつ頃曉の鐘は迷途の使

○月夜に挑灯　離を走る武士の情
　三五夜中は新月の色かゝ付こむ發明いむされつゐた器量本の敵とれもひよつた神の御利生

四之巻

○地獄て佛に　敬の有亭主が情
　酌かはす酒ハ徳利の輕さ底のぎれぬ男の胸の中をさぐつてをるくらがり思ひも寄ぬ非人の案内

○子ゆ甘ひ爺の分別は此世をさる智恵
　心から心まよはす道具やハ子故のやをふみちがへたる下屋籠り疑ひのとれぬ女房は昔を忘れぬ忠義の略

○非人の心脇かゝ見へぬ山崎の下向道

壁に耳聞とつたかたなの銘は重代のされ物二人が諍い我身の上由來を聞て呑込だ武士の情

五之巻

○我姿も古ふみせる茶人の才覺
兄弟に情を掛橋は義理を琢心の鏡曇りの有談合の相手に氣を配る亭主方は
一盃喰た顔

○因果へ車の輪廻り合ふ親の敵
非人の戀は鹽のない口車にのせても乘らぬ兄弟名を聞ばれやの敵は優曇花ひらき初たる武運の門

○殿様の御褒美は身を捨て浮瀬の盃
取傳へたる梓弓引もちぎらぬ大手の群集は祝義の壽松竹の嶋臺は直なる
浮代に大鳥毛振出したほ加增

目錄終

女非人綴錦壹の巻

作者　八文字屋自笑
同　其笑

○勸學院の雀を似せる王城の書窩

世人歌曰昔の京は難波の里中頃ハ奈良の京今の京と申い萬世の中平の京と歌ひ雖も理り成かな家富國榮町に四民の軒をならべ春夏秋冬の樂み雪月花を弄ふ遊人京といへば名にしれふ吉野の花更科の月龍田の紅葉にもれとらぬ詠と見及び聞傳へて遠近の田舍より上り集りけるも大方ならず殊更六月七日ハ祇園會の納涼とて四條川原の流水納涼の竹榻をならべ暮るより川流れ打ち數百家の茶店となり東西の石垣町のあざやかさ芝居見せ物輕業物眞似どん〳〵響く大鼓の音万燈の光りを帶びて日本に又となひ繁昌誠に平安の都といれもひ出られぬ明れば六月十九日涼みの日限も過芝居みせ物の小屋も片はしより取くづして川原表もすてし物靜かに夜毎のともし火もきへては秋の氣のかすかに目にはみへねど風の音あさむさを防ぐ茶と宿なし畫寓共川原を我と寄こぞりもらひだめのめんつより取出すは魚類精進取させてみな面々が前にならべ中にもさし出る頃の三かさみの八けふは何でも能仕合

酒もよつぽとかせひだ程ゑふのたまり皆々寄て盃事近ひ頃になひ酒肴皆々めんつ持てこいと髭口あげてわめきければさくの市とて利屈の片わらにはらばいして居たりしがれさをつてコリャイ八よ三よ四ゐらも生れれちの非人乞食でなひといへば物の道理はしる筈先けふ乞彼岸の入とて誰しも精進をする日なり此樣に乞ゑゑなり下つても未來は成佛の緣を求め結構な安樂こくとやらいふ淨土にむまれ今生の非人の苦をのがれふといれもいずいかにめづらしひ肴じやとてちつと遠慮したがよひ南無あみだぶつとつぶやけばかざみもごろもむくりをれこしやイこやさくよゐゐらが前でいま〳〵まひ南無あみだ佛聞たふなひ此兩人は昔非人にならぬ先には日蓮宗にて後生の一大事を願むにい南無妙法蓮華經かたしけなくも題目といふて今でも目ふさぐと其まゝ極樂へずる〳〵淨土の樣にあまひだ〳〵とあまひ事いふ内に無間地ごくへまつ遊さまエ、いま〳〵しひ耳がけがれたとすりのけばざくの市ごらをたてコリャやいめつたむしやうにいま〳〵しひと夫程いま〳〵しかる念佛なら乞淨土宗のあまり物齋非時の喰殘しをもらわぬ筈日蓮宗じや淨土宗じやとひぢをはり諍ふ乞世にある時の事南無あミだぶつで極らくへ行はこそ添なくもこちとらが口から申も勿躰なひ事なから宗旨の吟味をなされた上で今も世間に淨土宗か澤山な聞えはつた事もある

が法花宗は宗論にまけて皆袈裟をはがれたといふは慥な事ゆへ今に其證據が殘つて京の中のなんどやらといふ寺に有といふ事をわゐらは知らぬが有難いとは淨土宗の南無あみだ佛といはせもたてずヤイ〳〵さくめ何ぬかす其時法花宗が負たはかたふどがれはく淨土宗の肩を持人々にいひ付て小僧共の袈裟をはぎとり無理に淨土宗の勝に仕をつた此事は委しく日蓮宗の僧達書物しるして置れたげなうぬらがしつた事ではなひと一口にやりこむればさくの市あざ笑ふてイヤ其時の宗論にたとひ淨土のかたふ人れはく共過半日蓮宗の人あり法花宗の寺僧日門といふ僧に意趣遺恨があればとて現在面々が宗風の負を何として悅ふべきぞト蓮宗の坊主の書た物は証據にならぬ淨土宗をそれればめつた無性ふ敬の樣に思ひ諸宗をそしり何でもなひ樣にいふ日蓮宗の我慢者殊に日本の地にゐて日本の神祖へも參らずれのが寺内に三十番神とやら云祠をたて、是を尊敬し日本の風儀にそむく仕方上をないがしろにし下をあざむく曲者神敵も同前わゐらが宗旨が有難くば其寺々の門前に住居する事も成まひ坊主ぐるめ日本の地の外へ出て行其後は勝手次第に口をた、けどやりつくれば二人の者は眞黑に成て腹を立扨〳〵につくひあでた骨引さいてくれんとれとりかかるをさくの市も身がまへして論にまけた腹だちに腕さきの勝負かコリャおかしひと肱をはりつかみか

文彦
おろし袖引
さめる

これハかゆ
しちい
こるもの
きんちゃく
物

、らん其氣色まことに非人の口論にも呑喰の事ばかりかと思ひつるにさはらしき法義せんさくやと道をとほるぞめき歩行の若ひ衆も堅燗を呑んで見物する所に年の頃廿一二と見へし非人夫婦づれにてかの爭ひの中へ旦け入手を上てコレ〳〵両方ながらまつ待ちや二方たちがあらそひも呑喰金銀の事でもなくひつきやう法論といふ物其あらそひい君子なりと唐の聖人もはめて置れた近頃殊勝に存る去かしいづれも宗旨といふ物は祖師達の見識ゆ出て經文の道理を定めて皆夫〳〵に見やうによつて八宗九宗とわかれどれがよひ是がわるひといふ事も中〳〵其方や我々が耳學向の聞て法門の及ぶ事ならずさるによつてむかしより何れも宗旨をたてれかれ今の代までも崇敬してたれも点の打人がなひそれに面々が私了簡にて何のかのと顔をあかめてあらそふても善惡の分ち手がなひとかく宗旨と銘々がすいた宗旨に成て他宗をそしらぬが上分別といひ祖師の心にもかなふたと云物重ては無用〳〵と詞に實の有ル非人が挨さつかざみもざくも肝をつぶし汝はつね〳〵非人の中でもどふやら色白で去はらしひ風俗どふでも其女房ゆへ親に勘當うけて非人と成たと見ためいちがふまいこちとらとてもむまれながらの乞食でもなひまづ汝が身の上ばなし聞たうへこちとらが身の上をも云て聞さふあの聲がうつくしさではかふ成たも無理ではなひと云所に大佛開帳の

下向の人數はるかむかふにくるをそでがざみもざくも打慢び何でもよひ鳥が來たいやでもふふでも壹錢づゝ仕てやるはたしかな事サア來い〳〵と打つれだち旦那樣くださりませと聲をかけ皆〳〵川原を下へはしり行跡には非人の夫婦づれ火うちこち〳〵石の火にゝるめばす煙ぐさ人なき折を伺ひよつたる侍は田舍ながらもよしある風俗二人に聲かげコー〳〵それ成非人の女房へ來ひとよばれてはつと不審ながられづ〳〵そばへそひよればいやさてはひ事も何にもなひ見が顔を見わすれたかと云れてびつくり顔を詠めヒャアほんに兄樣じや面目もない此ぞがた御目ふかゝつて恥かしやまひがけなやめいわくやと迎んとするをコリャ〳〵まて用が有エ、れのれ婦めにつくひやつ出兄が目をぬすを忍び男と欠落去て行方なく成たる跡にていい名づけの男といふもれつきとした武士やう〳〵に詫をしでよう〳〵埒はあけたれども一錢も蓄へなくかけ落仕れつたれのれが難儀な兄弟の心で不便さにいづくいか成所に居るぞどそれとはなしに問つゝろふに此一條は原に非人と成てあるどの風説京見物のゆいとまとかなはず病氣と拵詐し生をいひたて今此京ゑ運りうせしも汝らに逢ん爲と語れば二人は二度びつくり驚かねは兄の慈悲心に物をもいとずさしうつむきしゑながして聞ゐたりぬ

◎壹富士貳鷹三拾両といふ夢ではなひか

兄惣右衛門かさねていひけるは最前非人仲間の宗論汝が夫がいひ分に聞所あつてひそかにうかゞひ聞つる所に其方が顔を見て先息災で居る躰兄惣右衛門と名乗てたゞめんせんにも外の非人の見るまへいかゞあらんとためらふ内非人も立去人氣のなひい兄弟對面せん天のあたへ拙其方がつれそふ夫の名は何ンと云人名を聞て安堵ゑたひとゞへば思ひ出之介手をつかへ我〻が名はちと子細あつて唯今はゆにくい此儀は御免下さるべし色にまよひた妹子をそゝのかして國もとを立退し不どゞき者ゆゑかりもなく結かうなる御あいさつ生〻世〻わすれがたし二度本の武士に立歸らば此御恩はほうずべしと世にしみ〴〵と物語れば惣右工門打うなづき尤のいひ分今其姿で本名はあかしにくひ皆然らば我〻が妹を一生見捨まひ女房にせふといふ證文を書れふと懷中せし矢立を取出まて前にかげばいかにも此儀に相違なしゆゑ妹子は我〻が女房いか樣に成とても見放しゆまじと筆を取て證文をたゝめ判をすへてさし出せは惣右工門請取てはなか〻袋にをし入彌々此上妹が事を賴入是は近頃輕少ながら我〻が寸志と紙入より取出す金子三十兩は貴殿へ進上申も隨分御無事でかさねて御目にかゝらん先夫まではさらば〴〵れまへも御無事で兄樣さらばといふ聲もはや程遠く行かげを見送り〴〵思ひ出之助件の小判をおしいたゞき扨々其方が兄さはさつひ金持久しう逢ぬ小判の顔扨も久しや珍らしやと小判の耳を撫へてならべ惜なんとれかねかふ見た所は素人づきのあるかいひらしい横びつ形の顔ではなひのと撫つさすりつ悦ぶ折かゝ最前の非人共が立歸るをそて首にかけたる袋の内へ小判を手ばしこくかくしいれそしらぬ顔してゐたりける非人共口々にわゐら二人は爰に何して居た又女房と例のじやらくら能女房持たと思ひちつと自慢か惣休非人仲間へ入には作法がある先汝も新米乞食なれば酒壹貳舛に干鱈でも買て仲間へ酒を振舞が此川原に住非人の作法扨又どのやうな女房でも非人になれば我一人の女房にする事も成にくひ惣仲間の女房ちつとわれらも抱付ふかとしなだれかゝるかざゝの八が手をゑたゝかにたゝきのけコレ爰な人何しやるわしには思ひ出之助といふてつさとした男が目の前にあるが目に見へぬか道ゑらずと腹を立ればイヤ口のませた女免が有道を立れは非人といはぬわい男呼り置をれとつかみかゝれば思ひでの助立ふさがりかんにんすればほうずもないやつ指でもさへたら目に物をせんと腕まくりして立上れは非人共口々にヤア目に物見たひが何ンとすると大勢一度ゐ取まいせばさくの市をし留め皆の者共此頭分のさくを指置我まゝひろいで後悔するな非人でも乞食でも道ゑ道に立ねばならぬ法を破

る存外者れがいふ事聞ぬやつは川原の住居ならぬ〳〵とちへ成ど失あがれとかさにかゝつてきめ付ればくいなが詞あやれそれけん者々去り込しとど見へぬ何ンの道にも頭分は有べき事非人の中でも頭分のいふ事をれそれうやまふは實に棟梁の下知に從ふ隨兵のごとくに菰かぶりの棟梁とは知られたりかゝる所へ歴々の侍二人案來引連れ此所へ來り非人共を僉儀しけるハ此中に往來の者の巾着提物を切取金銀を盗む奴徘徊する由其聞へ有にたかつて片とし から吟味する汝らが着類をぬぎ改めてみせよといひければ非人共乙土にくひ付畏り私共ハ左樣の覺へ御座りませぬ胴乱に思召さば裸に成て御目にかけんと皆一同に帶紐とひて縷わんぼをふるひ立て御覽なされまず通り何ンにもうさんくさひ事ハ御座りませぬとかくそれなる新米の乞食め夫婦ながらこちとらとは違ひ顔そふなりでひだるそふにも御座りませぬ焉乱な奴いきやつら二人御僉儀なされたら大方盗人が知れませふと云ふ迷惑そふに思ひでの助かの侍の前に手をつかへ私共二人乙近頃より非人と成て新米の乞食でござりまず人の物をぬすむ樣な者でも御座りませぬ少の事にて親に勘當請此さまに成まして乙御座れ共紙一枚人の物を違へた事は御座りませぬ疑ひをはらされ御歸りなされ下さりませといふをつく〳〵打守りコリヤ〳〵非人成程そち二人は近ひ頃かの非人と見へた

定て今ハふ通りに偽りも有まひけれ共外の非人も裸に成ていひわけを仕たしば其方ハ裸にならづいひ分ヲでは吟味に依怙贔負の有樣にて僉儀がくらひ某は春藤孫之進といふ者失成は澤田友九郎といふて奥村式部が家の子と以ふに驚く顔色にて逃んとするをれかねが引とめ覺のない我〻が身たとへどなたがれ出なされ御吟味有ても氣遣ひなひ裸に成ていひ立げを仕ゐへといへば非人共立寄てつね〳〵合点のゆかぬ新米めと思ひしが扨は裸にならぬかトは盗人はれのれに極つた帶を解て吟味せよ仲間の面はれに成事と遠慮もなく大勢取付いやがる物を無理やりにをびをやとけばコハいかに金子の數はしれぬ共ずつ去り落たはヽヤ何ンじやと取上れば財布に入し三拾兩非人共肝をつぶし此金はどこに有た誰にもらふた天から降たか地から湧たかどふじや〳〵とせちがへ共思ひ出之助は返答なく女房れかね引取て此金に乙子細は有金まつたくぬすをし金でいなしとハいせもたですイヤサ其子細をあり樣にぬかせれのれ一人して仲間の難儀盗み取とにちがひい有まひ申〳〵御侍樣分に過た此金をてゐるからいこいつぬす人に紛れとでざりませぬ急度御吟味下され我々があかりを立て下はりませと圖にのつていひけるにぞ女房ハ兼は氣の毒がりコレ思ひ出の助殿あの金の樣子をハふて此場の難をのがれてたべ申シ御兩人の御侍樣此金はわたしが兄とい

はんとするをヤイ〳〵女房其旦けいふて能ものかと去かりつくればいへ〳〵いわねばにせへの難義ヤいふたらば夫婦の縁きるそれはどうよくな事ばかりそんならいふなど互のあらそひ孫の進友九郎始終を見聞てつつと寄れのれ何ンでも物くさひ僉儀の有はれのれ一人それ引立よといひもあへず組手の大勢むら〳〵と立かゝり思ひ出の肋に縄をかけろれ〳〵用意の駕籠を持てとよばはればかねて支度や仕たりけんざる駕籠一丁かきすへて思ひでの助を無理やりに押こみねぢこみかいて行女房れかねはみるにかなしくコレのふ其駕籠待てたべこちの夫に咎はない御聞入ないならばわしも一所につれてゐて下さりませと泣てがるれば春藤孫之進立とまりいや〳〵汝は女の身なれば咎はなし屋敷へ同道ハ叶はず其代りには此三拾兩は汝にとらするぞ夫がなき跡をとむらひなり共勝手次第かならず歎くな悔むなとひ捨て件の三十兩をおかねに渡し非人を呼よせ汝らよく〳〵いたわつてやるべしそこ〳〵に氣を付て立歸る春藤！情なきやうに見へて物の哀は知つたる侍とは見へぬされ共れかねハ聞入ず何國迄もとかけ行をさくの市がひんだかへてはたらかせねば詮方なく泣る外の事ハあら不便也

◎番ひ離れて鳴は四條の川千鳥

密の朱を奪ふを憎むは其眞儀を乱る故也賢愚の佞人を選さくるは其災害を恐る、故なり父に國主奥村式部卿去年の秋逝去あつて一家中悲歎の思ひ浅からず國中恰亮陰のごとし式部卿の仁義厚く國民をあはれみ給ふ事子弟のごとく成ゆへなるべしされば光陰一瞬に流れて三年の裘もかりていつまで悲しむべき事ならず御家督相續の事一家中は申に及ばず御後室彼是心を碎き給ひけれ共似合敷御方もなく今は家中の中か御養子有べきかと僉儀ばかりち成る所に執權春藤孫之進がはからひとして此沙汰もやみてければ家中の面々何事にも春藤がかゝる斗ひとなりけるそと不審に思ふ者も多かりけるがいつの頃か春藤孫之進澤田友九郎兩人有馬の湯治といひて出行けるが唯今立歸りたる由御後室様へ披露しければ後室悦ひ給ひ奥の御殿へ召れて何やら密々に仰合れけるハいとふたんにみへぬや、有て後室仰けるは兩人が同道したる佐々木數馬ハ何方に有けるぞ早〳〵爰へ同道あれとの給へば友九郎合点のゆかぬ顔付にて此度生捕て參し乞食直の御用とは一圓呑こみ申さず先頃仰を蒙り子細は存せずハへ共孫之進が指圖お任せ京都へ同道仕り彼非人を召取て罷歸りハ事始終不審に存れは欄子を仰聞られかし拙者も孫之進と肩をならべ御家譜代の舊臣なれば御心置はなひ咎と少恨みたる体なれば孫之進友九郎がそばへ近くさしより成はど貴殿の不審尤至

極此事は犬猫にも劣らさぬ大事なれ共貴殿と我とは相役万事申合さねばならぬわけ故此度京都への同道も貴殿を外にせぬ心底扨かの非人思ひでの助と申いい誠と大殿式部卿の御妾腹の子なりしが當御臺樣の御心を憚り町人に御預けなされ置れしが御成長に從ひ悪性にして人の娘をそゝのかして矢落し渡世のいとなみも御存なく都四條川原に非人と成浮座あるよし御臺所唯今の御後室樣聞召及ばれ何とぞ尋出し此與村の家が相談させたいとの御頼みあつされ成御貞節てかけ腹の御子を取立御家督を讓らせられんとい扨々感じ入たる後室樣の御心底ちつ共御氣遣ひ遊ばすなと請合京都へ上りかの御子佐々木數馬樣にめぐりあひ人先を憚り非人の姿を隱さん爲わざと駕籠にて御供申歸つたり樣子といふはかくの通り必ず人非人と成ぬふ事は堅く沙汰なし貴殿の爲にも向後は御主人樣隨分もり立申されよと一部始終をとつくと聞て友九郎肝をつぶし扨はかの非人が大殿の浮妾おさがやの〳〵腹に出來た數馬さまか是い思もよらぬ事と云ばらくあきれて居たりしがイヤ是孫之進見知のなひ數馬殿を大勢の非人の中で是がそふじやといふて同道せられたは慥な證據があつての事かといひければ孫之進打わらひ是はゞ大事のほ等者に證據がなふて濟べきか先第一平人と違ひ大殿の血をわけられしほ子なれば外の者とは譬と墨眉のかゝりほ面躰孫之進が目い違はじ其

証據は數馬樣の懐中に定てほ幼少よりのほ守袋有べし其中にほ誕生日が書てある筈見せやさんと表に向ひ其駕籠こなたへ〳〵とよばゝる聲にあつといらへてかきこむざるかごの覆を明て立出る佐〳〵木數馬あたりを見廻し不審顔後室見ぬふあしが數馬かなつかしやとのふ詞にいよ〳〵ふしんはれずたゞ忙然と云て居られしに孫之進そばへより浮合ふ行ぬはほ尤此れやかたは奥村式部卿の御舘式部卿ハ逝去故御家督御相續の爲ほ同道申せしと段〳〵の樣子を語り扨式部卿の御子と申云るしは御守ふくろに有べしと數馬が首にかけたる守袋を開き見れば實も孫之進が詞に違はず誕生の日限年號月日迄書付たり孫之進近習に向ひ夫〳〵と云に從ひ持出る小袖大小黒羽二重に御家の紋きらめき渡る刀脇指取手も遲しと孫之進數馬が衣裳を着かへさせ飛しさつて頭を下にける後室いそ〳〵悦び立此上て家に於て氣遣ひなしとてもの事に善は急けじや今日の中に家中の者共へ云聞せ悦ばせん此事早く披露あれとのたまへば數馬はやう〳〵疑ひはれて扨は某が誠の親式部殿の舘成なるかや非人と成たる御腹立にて召寄られ首うたるゝにてあるべしと思ひの外なるせんぎ某が身は立なから不便や昨日迄某に付添介抱せしれ兼を振捨假令大名に成たとて詮もない事殊に天知る地知ると云本文いかに隱し包む共非ハと成た身が此國の大名と成人の謗り天道の冥加

もそら恐ろしと覺悟極めて後室の前に手をつかへ幼少より御傍にて孝行を盡す事もなく非道にそゝ乞食と成たる某を御不便を以て御取立下され奥村の家を御讓りなされんとい有難く忝なくは存れ共弓矢の道に疎く太刀刀の指やうさへ存せぬ某御家相續とは存もよらず却て先祖の恥辱を爭はず道理兎角某には御暇給り家中の内より御養子成れ御家相續成れ下さるべしと承引をまじき躰を見て友九郎申けるゝ是は數馬樣の仰も尤に御血脉なれば迚一度非人と成給ひ普く諸人に面をさらし給ふ事いか程に包むとても隱す事ゝ顯れ易く此義は數馬樣の顧ひの通り然るべき器りやうの人がらを見たて御家中の内より御養子有てしかるべく存奉まつりとはゝかりなくいひければ孫之進むつとしてイヤ是友九郎殿數馬樣は先殿の血脉あまてましませい假令非人はれろか盗賊と成下り給ふ共御心さへ善心ならば何の咎る事のあらん龍は泥中に有て龍盤魚に侮らるれ共ちつ共龍の瑾にはならず殊更外に誰有て御家相續する者なきさし詰は數馬樣斗り御承引なけれゝ御家は斷絶我々とても筋なき主君あは仕へぬ所存とのへ引ならぬ手詰の論義後室も諸共に孫之進のいやる通り外に相續の人もなひ由又有に仕てからが現在の數馬を指置てはとつからが妾の子を疎略にゝたと世間の人の雜口あかけられて分がたゝぬ武士にうまれて武士の作法はゝらずかれや孝行はれも

はずかき、入ばそなたが不便をかけた女もあると聞たれはそれも跡ではどふ成となりそよなこと大名の身になりては氣に入たものは何者なりともハテ扨は氏なふて玉の輿といふてはないか第一ゝつからへの孝行あつといふてたもれのとよどみゆがまぬ利屈詰に數馬も何のいらへもなく唯有がたしと斗にて疊に手をつきれそれ入て見へければ孫之進取つくろひホチ御合点が參つたるろれ〳〵家中へひろうせよ若殿樣へ御目見へあれと機轉きかする孫之進が下知にしたがひ家中のめん〳〵そりやわかとのへ御目見へしやとかみをゆふやら月代そるやら刀よ棒よとあてふだめき出仕のてい降て來たやうなこゝちとそ見へぬ友九郎もふしやう〳〵千秋万歳れめでたふぞんじまをると顔ふくらかすも又れかしかりき

一之巻終

第二巻

◎惡と欲と思ひ合た主從の契約

勢を以て君に仕ふる者い忠なく功を以て人に交る者は信なし澤田友九郎は己が舊功を高ぶり奥村式部卿逝去の後も事によつては家中をなびけ我氣にかなひし者を取立て奥村の家を相續させんと内々野心をくゝだてしが此度孫之進後室のゝからひとゝて佐々木數馬に家督を讓られける事を無念に思ひいかにもして數馬を追失んとは思へ共かく邪魔になる

は孫之進なればきやつを味方にそへる斗略こそ肝要なれいかゞはせんと案せしが他人にむさと談合する事にもあらず何とぞよき家來をかゝへ此事を仕負ふせはいつかとの知行を宛れてなはんといはゞ欲に耽り仕負するは必定と了簡して爰かしこを聞合せ才智の有そふ成侍奉公人を尋させけるが折ふし都方の者なるが此奉公仕度由申來りければ取次の侍友九郎にかくと告けれはヲ、幸〳〵願ふてもない所器量をみて召抱んこなたへ通せといふに從ひ御免といひて玄關より出來る男大名島の長羽織黒ひ小袖に茶宇の袴衣紋りゝしく大小はくいん貫さし左右に接して友九郎が前にひさまづひて子うやまひ居る友九郎顔をみてびつくりしヒヤア其方ハいつぞや都四條川原ふて見知りのある非人じやなひかと星をさゝれて彼男も肝をつぶしげに〳〵おまへは其時非人の仲間を吟味なされしゆ侍澤田友九郎樣か是はしたりおもひがけなひ御對面をれどろく顔をつく〳〵守り扨汝は此屋敷を某が館共しらず來りしよなにかにも〳〵おまへの御屋敷としつたらば何の參りまゑよ曾てもつて存せぬもへ此仕合といひければフム、、扨は此屋敷を身が館とてしらぬも理り然し何ゆへに今其衣服大小をかざり武士の姿には成たるどかくさず共樣子をかたらばちと其方に頼みたひ事あり但し以前は武士の身なれ共越度有て乞食と成たるを一家一門より取たて本の武

士に成て奉公をかせぐといふ樣な事か子細はどふじやとせりかけてとへばされば拙者る元來は須藤九八とや近江牢人にてひひしか不圖したる事より一家に身限られ御存の通の非人となりいかにもして本のごとく大小が指てみたひと存れ共正眞の西瓜の井戸へ落たるごとくあがるにもあがられず四五年も四條川原の石の上の住ゐ水の出る度〻の堪難御推量下さるべしと物がたりすれは友九郎聞てホチそれは左も有なん其非人の苦をのがれ其姿に成たわけとぞふじやそれが聞たひといへば此儀はうかつにやがたしなまへの御願なさるゝ品をうけ給り其上で申上ん先〻れまへの御たのみの樣子仰聞られかしといへはされはそれがしか頼たいといふ事もかりそめならぬ大事のしなゝれ共いはすふゐてもすまぬ事子細を語らんこなたへ來れと家來をしりぞけ小聲に成元來某は當奥村式部卿の家臣澤田友九郎といふ武士先頃都四條川原にて見る通り孫之進同道にて非人を生捕歸りたりいかにも〳〵思ひでの助と申いろ白な非人を駕籠にのせ御かへりなされたをて其非人となにとなされまゑたされば〳〵其非人先こ此やかたの式部殿の子じやと有て此國の城主奥村の家督相續する談合にきはまつたと聞て九八びつくりし是は〳〵さやうとい御物語扨々其非人めは仕合者で御座りますして其跡ととひかくれは是のら肝文の所よふ聞てくれよ某内々此國の權威を

握り氣に入たる者を主人に取たて一家中は拵れき一國を我物にして押領せんと思ひもうけて居たる所に存もよらぬ青蠅の樣な非人めに家督をもつらせ其非人の家來に成て下知を守らん事口をしき事と思へ共あの春藤孫之進といふ痩れやぢをなか〳〵自由になるやつならず何とぞ孫之進を人しれず打殺せば立ふと伏ふと某が心まかせ後室は女の事ゑとふせふと心安ひ事なれ共いかにしても春藤めにこまりてたりさるによつて其方を頼みて孫之進をひそかにさゑ殺す手たてもあらばとれもふに付て此談合此事仕負ふせなば褒美はのぞみ次第知行成共金成共とうまひ事の有丈をたくしかゝれは須藤九八ゑつぽに入其咄しを聚て扨々私も大慶何をのくしませふ私が此ずがたに成たは其非人が女房おかねといふやつを下川原にて打殺して兄とやらにもらふた三十兩といふ金を奪ひ取俄に大小をこしらへ衣裳を調へまんまと武士に成てゆ然れば其非人も孫之進も某にゆ怨ある者殺して仕まへば我らも勝手かならず〳〵此事を御沙汰なし孫之進を殺す事は我らに御まかせゆへと心やすふ請合ければ友九郎大に悦び是こそは天のわたへ昔周の文王と天下を治る瑞相に大公望を得て家臣とし車にのせて歸られしと聞たるが定て此樣な事でかなあらふ此友九郎は文王其方は大公望惣軍將を手に入ふも疑ひまひと酌子定木の當ずつぽう下駄と燒みそより違ふたる

料簡なるべし須藤九八も仕すましたりと悦び先に能首尾のある迄とたがひに主從の約束ゑて立別れぬ斯て佐々木數馬ゆ思ひもふけぬ俄大名に成てよろこばるへき事なれ共都に殘せしおかねが事をあんじ暮していかゞ成行しやと心元なく一城主の榮花より四條川原のころび疵がまゑじやものとむかしの事を思ひ出してゆいする所へ春藤孫之進御機嫌伺ひの爲參上と披露して奥へ通り數馬に對面ゑて申けるは只今某か宅へ掛橋惣右工門と名乘旦那へ直に御目にかゝり申上度子細有よし拙者をたのみ參りしゆへ是迄召つれてゆ存の者にてゆやと伺へば數馬聞て成ほど其惣右衛門と云者は子細ある者にてゆゑねばならずこなたへ通せと有けれゆ孫之進立て出惣右衛門を同道し御前へ出れば數馬みるより扨もなつかしや惣右衛門都にての心ざゑを今に忘すれず過分千万其禮をいはふにも國所はきかず今迄は延引せり某子細有て此奥村の家を相續してかく榮耀にはくらせ共わすれがたきゑむかしのよしみおかねが身の上心元なく朝夕案し暮せしが御自分にはおかねが行衛存なきやとゆはせも果ず惣右衛門數馬に向ひ眼をいからしコレ〳〵數馬殿御自分にはまが〳〵しい事をゆひあさるゝおかねは某が妹成敵いつぞや都四條にて出あひくれ〳〵おかねが身の上を頼と當金子三十兩をわたゑ歸りしによふもいもゝおかねを殺して其金子を奪取かくのめ〳〵とし

てゐらる、よないか成大名高家成共此惣右衛門が妹の敵いかな〳〵安穩には置とせじサア立上て勝負あれと尻引からげ身繕ひ鍔打してつつ立たり數馬も孫之進も肝をつぶし是は存もよらぬ難題毛頭此方に覺へなし卒忽あるなといはせもたてゝイヤ覺ないとは比興至極いもとれかねが有ては御自分の出世の邪广に成と思ひ殺されたるに違ひしそつちから打かゝるか但亥は此方から切掛ふかと聞入なさ惣右工門が數馬樣は某と相役の澤田友丸郎と兩人御供して歸り其元の妹子れかねとやらんに金子三十兩わたし覆外の非人を賴みてかへつたる跡にて殺されたる妹なれば此方わ存せぬ事殊に數馬樣御不便かけられしれかね殿の事なれば折を見合せ此國へ向へ二度數馬樣と夫婦の緣をも取結んとこそれもひしに殺すなとゝ存じもよらず殊さら三十兩の金の行衛もしれぬなれば推量するに盜賊の業か其時山原に徘徊せし非人の業か二つに一つい疑ひなし二度刀をさゝぬ法もあれ此孫之進が詞に偽りなしと道理を分ていひければ惣右衛門もゝく然としていか樣云るればそこもわる數馬殿を一圖に恨みしゆへ外には心つかざりしかいかさま其時の非人の內か盜賊の仕わざもはかりがたし是より都へも立こへ彼是吟味致すべし其方の詞に偽りも有まじければ共に心をつけ御吟味をたのみ入數馬樣れさらば〳〵聊爾成事申てさゞ御腹が立ませふいや〳〵其方の疑ひも尤此上は某も共に力をあいせ孫之進に僉議をさせて見出さんもしも本意を達せられば早そく此方へ知らされよと約そくかたさ義士勇者こゝろもとけて別れゆくはなむけの盃とり〳〵に一つ二つの酒の亥ひ下戸ならぬ男の顏はちろ〳〵時

◎ざらん颯とひゞき渡る奥座敷の酒盛

大和の國の一城主奥村式部卿の家督事故なく數馬お仰付られ縁目の御目見も首尾よく相濟鎌倉より上着有ければ近國の大名小名より思ひ〳〵の祝儀の進物長久祝ふ長水ひさ申を結びし妹と脊のいひ名付の奥方ゝ國を隔て遠江濱名の城主の方より御縁組の約束極り大奥方よりの使者として男まさりの淵明者年も若木の櫻を染ぬ紅葉といふ女進物かざらせて廣書院に立留り誰そや取次を願ひましよといひ入れは奥よりいらへて立出るは春藤孫之進が娘姉は藤なみ妹は磯野とて器量につるゝ心ばへ常世風の裾もやうふり袖すがたもえとやのにふたりつれ立出むかひ是は〳〵もみぢ樣とやら遠ひ所をゆ出の樣子先達て承りまして御座ります先は御苦勞樣御屋敷にも皆〳〵御機嫌よふて御嬉ふう存まするとわいさつすればきれば事で御座ります此方の御屋敷をなたにも御さげんはよけれ共氣の毒はかゝよ姫樣はやふ嫁入して殿御のれかゝが見たひとの御事にてそれは〳〵さつう御せきなされまそと

いへば藤なみ打わらひあのかはよ姫様は戀のいろはも御存有まひと存まし たがもはやほの宇を御存でご座りまするても扨も御器用な御事でござんする れ姫様さへそれじやもの此方の殿様とさそや御待かね遊ばしませふかふ御繰組有からはよそ外かならぬ御一門奥へ御出なされくだい様へ直〳〵に御口上を仰上られませわたくし共が御案内申ませふと先に立女子同士いれく底なくはた〳〵打つれ入にける折から來るい澤田友九郎が使者須藤九八唯一人御祝義を申上んと來りしが廣寿院の次の間に扣へゐてそば成刀かけの刀をつく〴〵と打守り居たりしが中にも春殿孫之進が指料の刀をみて尋常に替りし拵なればいか成者の刀なるぞと人のないを幸にそつとぬひてみれと唯物ならぬ燒刃の光り去のぎきつさきもの打まで どくと見濟し鞘にれさめ我指料と摺かへてや置ん見付られては大事ぞと眼をくばる折こそあれ奥より出來る春藤孫之進今朝より奥に相つめ御目出度酒の酔機げんにてなにもなく來るに驚きそつと刀を直し置さあらぬ躰にてゐたりける孫之進ちらりとみてそれ成はどなた成ぞ何の御用何方よりといへば九八手をつかへいや拙者儀は澤田友九郎家來須藤九八と申者新參者ゆへ御存じと有まそ主人友九郎折節の病氣ゆへ名代に參上と云顔つく〴〵打守りゝウ其方は去頃都四條川原にてれかねを預けし非人くいなの次郎とどやらいふ者

ではなひかと肝をつぶせば須藤九八かくしていあしかりなんと思ひ成ゐど御目鑑の通り其ときの非人くいなの次郎御みわすれもなくよふ御存で御座りますといへと春殿手を打て扨〳〵れもひよらずどふした事にて友九郎の家來にと成たるぞと不審がればされば此儀に付ていれまへゐ申上て沒相談申さねばならぬわけ有と孫之進かそばへ近くさ寄て申けるは某元來近江牢人子細有て非人とと成下つてい へ共兵術六韜三略の奥儀を究め孔明子房かも我朝の楠にもれとらぬ程の軍術有故友九郎殿の御耳に達し取上られ今此武士に立歸りて い然るに御當家奥村の節日正しく武藝ゐ名ある勇士を見立御養子有べき所にゐのに先殿の御子なればとて武士の道にうとく乞食非人と成たる思ひ出の助といふ馬鹿者を御養子とは後室様孫之進兩人の思案違ひなれは彼非人の成上り數馬を追出して然るべき器量の人を御家督相續ゐるやうゐ後室様へもれまへにも御合点の參るやうに申せと主人友九郎の仰せにて御祝義かこつけて參てい殊に近々遠江の濱名より御繰組ゐるよし若御婚禮濟た上てい事むつかしとやく友九郎殿の思召立に御同心あつて御味方なさるゝ所存か又と内々おまへの御息女藤波様事主人友九郎懇望致されいへば主人方へ遣いさるゝか二つに一つの御返事唯今直にうけ給らんと孫之進に無休をいひかけ切殺さん下心なれば孫之進が五音に氣を付身

がまへ仕てゞ申ける孫之進始終を聞て大きにいかり扨々非道至極の友九郎が所存かな非人にもせよ何にもせよ外の者を御家督といい成ぬ事〳〵又娘藤なみを友九郎前々より望むと云共承引せぬ某が心底外ならずかゝる不道人と見付しゆへ是もつてふつ〳〵かなはず扨又主人數馬樣の御不便をかけられし紅葉といふ女の討れたるも合点もかず何角に付てにのれには僉儀のあるやつ繩を掛て御前へ引くと早繩たぐつて立上れば九八あざわらひ大事のことを打明ていやといふを其分にしてすまそふや此方からゆるして置ぬといひさま刀をずるりとぬひて孫之進に切かくるをひらりと飛のき刀かけの刀をつ取鞘ながら〳〵と請るをひつぱづして樽にはらへば孫之進もさやぬきはなし代々傳はとる此名作切味の鹽梅みよと眞甲先がけて打こむ刀を九八すかさずめてにとびのき孫之進がよは腰をしたゝかに切付たりさすが我むしやの孫之進も深手によはる太刀先に受いつし〳〵よろゞく所をたゝみかけて切ふせのりかゝるのごひ我刀と孫之進が刀をすり替てしにぼつてみ人の見ぬこそ天のあたへと行衛もしらず逃うせける次の間へ立出る跡より孫之進が娘藤なみ磯野をゝり出みれはふしぎや是もどに血ながれたり紅葉是はと打ふゞろき申しる二人さま此體にて次かの血の付やう艶なされといふに二人も肝をつぶしみれば見る程疊の表それかあらぬか暮合項さだかな

らねば手しよくをかゝげそてよ爰よとさまたす所に緑の下成孫之進が死骸を見付コレ〳〵腰波樣磯野樣あれ〳〵あの樣の下に何者やら殺ゑて有といふにびつくり姉妹本に誰やらさつてある切た〳〵とよばゝる聲に興よりも後室數馬近習の人々ともし火かゝげてかけ出給ひ殺してあるとは何者それ孫之進をよび吟味をさせよと數馬が詞に氣のつく兄弟はんあとゝ樣が見へぬとゝ樣はいづくにとよべどさけべと音なければ姉の藤なみ庭に飛下り死骸の顔をとつくとみるよりはつと仰天殺してあるはとゝ樣じや何者の仕業ぞと七轉八倒立たりねたりとゝ樣のふと姉妹むなしさ死骸にもがり付なげくをみては人々もてんでに提灯さし寄てあきれ果て居たりしが姉の藤涙心かしてく孫之進が刀を見て此刀とゝ樣の〆料ならずとゝ樣の刀い家ゐ傳へし重代あを井下坂二つ胴數腕此刀を取かへてぬすみ取たるは日頃此刀に望を有者の仕わざと覺たり遠くはよもやゆ逃のびまじ追かけて父の敵妹ひさこひ尤と兄弟打つれ走り行を後室數馬しばゝと聲かけ呼とゞめ汝らが心底尤ながら大事の敵を思案もなく討んと思はゞ仕損せん事疑ひなし殊さら女の身なればかへり討にあとんも不便なりとかり事をふかくして敵に近寄本望を達する方便汝らにあたへんと一つの箱より襷めんつを取出し此二品は某以前非人と成しとき此道具ゐて命を全ふし今この身になつたる目

出度道具なれば後代の示しせにんと重寶として所持したれども汝が此度の本意を遂る門出の餞別にとらするぞこれを着て非人と成姿をやつし敵に近寄り首とつて父が冥途の安さうをとらすべしと手づから二人に渡さるれは兄弟の娘いはつと斗にれしいたゞき有難ひ殿樣の御惠みいにしへ晋の孫讓といふ人も漆をのんで形を損じ亡君の讎を報じたると承るそれい唐土是は日本所も違ひ男と女の違ひいある共一念力とれなじ事本望遂んい柴の内唯今早々御暇申上ますと立出れば後室も悅び給ひヲ、いさぎよし頼もしや非人の身と成とも物事不自由おない樣おゝ仰もれもき財布の中小判の數より御忍の數々有難涙と名殘の涙に御前に有おふ人々のもらひ涙を押隱し頓てめでたふ吉相を奥と口とに別れの涙ふ吉の涙押拭ひにつこと笑ふて出けるはゆゝ敷ぞそへぬ

◎兄の心い惡に塊た惡金買ひ

實や水の流れと人の身の行すゑ定めなき世のならいし大福長者と人にうらやまれし人もけふは日づかのいとなみに朝夕の煙をたてかね其日ぐらしに味噌鹽の世話に骨を折たる者も今日と土藏家屋數の主と成て左楊枝にてくらす者もあり彼を見是を聞に付ても貧さとて悲しむべからず福貴に成たるとてれごるべからず唯とかり難は人間の身の上なり福貴成人をみては利根者とはめそやし貧賤成者をみては安方者じやと侮るは愚者の業なりされば聖賢の詞にも福貴に至て道をしらぬ者より貧乏にしで道をそむかぬがましじやと仰られたと去る儒者の論語の講釋の時やされしを耳お挾て尤の事と思ひぬ斯て掛橋惣右工門は妹れかねが敵を尋ねかねて大國にもかへらず河内の國古市といふ所に借家がらして町人と成名字もかへてさふしや彌兵衛と人にしられて實貫に汕斷なく兼て皷に巧者なれば商ひの間に仕弟子をとりて皷の指南一人至て四人前打たり吹いたり大皷の手のまはるに付て身体も不自由ならぬ暮しならねど女房が三四年の病氣、參の代醫者への付屆に物入れはく成故かことしいめつきり身体の尾がみへて尻のつまらぬ樣に成ければ彌兵衛いよ〳〵万事に心を付てかせぐに追付貧乏なしと働け共日るふ成ては持直しにくひがんの身体柏子がわるふなつてはもの事ぐりはまロ笛の音もれのづからヒイ〳〵いふてくらしけるけふは女房の病氣本腹の爲夫の彌兵衛は石川郡に靈驗あらた成藥師おうと聞及て未明より參詣し留主には娘のれ瀧母れやの看病して粥のあんばい加げんの藥れや孝行の心づかひ年は十四五姿も心も打揃た壹人娘とあまやかす日比のちやうあいわけて世れやの心に成てはかく娘の親切さそうれしひ半分かなしひ半ぶん枕を上てコレれたき今日はいつもよりてゝろよひ食氣も出來る熟のさ

とうろう
金さへ入し
さいふ
をやる
うつまつ
めんつ
をはあむけ
やる
とーもと
いもと
いそのあけく
親
孫之進
ちろい

姉
ふまぬ
ひまを
もらい
うらさと
ばみ
出る
九八郎
のりと
ゐげたり

友九郎様といふ御方不慮の事にて牢人なされおれが所をたのむとれしやるゆへいや共いはれず二月三月とかくまふてもみたれ共時分柄米は高し口がふへてせつないゆへどちへ成とも往て下されといふたれば友九郎殿のいとるゝは此度牢人仕たこそ幸且れにまたしき一味の者をかたらひ奥村數馬といふたわけ者を追出し寶藏にかけ入案内いよくまつたり家の寶物を奪ひとり大和一國の主とならんとの企幸かなこむつかしひ春藤某も御味方にくゝり御用に立て歴々の武士になつて其方も高知の武家へ嫁入させ此様に破れ家の暇にい仕て貰ぬそれに付て急に金子の入用有れ共れが方にもわか金斗用に立金がなひあの娘のふ瀧めは色白て利口者ゆへふつと思ひ付たによつて奈良の里のくつ且屋に談合して五十両に一生かり切の約束して戻つたれは追付つれに來るであろ賣てやつて其金をこつちへ渡しやといひければ女房聞てコレ兄様何ンぼれまへの方に能ひ事があるとてこつちの大事の娘を賣て其金を横取せよとゝあんまりな事斗といへば源助目をむき出しあんまりとは何があんまりおのれも知つてゐる通りあの彌兵衛めにかゝつてれれが方からの取替はいか程あると思ふ朝晩のたき物何かふ付て此源助が損に仕てよひ物かどふでせめてもはたひてもちやんが一錢もなゝは知つてゐるそれであの娘を賣てやり其金をれが方へさん用立よといふ事

し引もなひ其やうに世話やかずともふとゝ様が歸らしやろ藥もかゆもとゝ様にたのんでたも我子をゝたはる母れやの詞を少も耳にもかけずとゝ様は遠ひ所へ御參りなされました下向なされたらさぞ御草臥此様な事がどふ頼れましよわしには丁ど相應な役目世話やひて病氣の毒な本の子でさへれやの心にそむくもならひまえてそなたは十四五の頃とゝ様と一所に此家へ來てわしを産の母の様に孝行にして下さる殊にながひわづらひで一トしはそなたの世話に成と打なみだぐみゝひければれ瀧と聞てあの母様とえた事が不思議な事でとゝ様は此家へ入むこにれ出なされれまへとわしはれや子の約束いたしましたれば本ンのれや嘘の親といふへだてとないつねゝとゝ様の詞にも本ンの母より子をかわひがるあの母ゆめゝあだに思ふなといいしやつた事聞てはどふえて不孝になりませふとれや子咄しの最中へによつと來るとえ彦坂伴内元來は澤田友九郎が家來なりしが牢人して此里にわる金買の源助となりて方〳〵歩行かへりがけ惣右工門が女房は妹なれば内外に付て心安くあがり口に腰打かけてハア是い妹けふは心持もよひかして顔の色もよひ彌兵衛とみへぬが内にはゐぬか幸々そちにはなして置事ありと女房がそばへにじり寄此頃れれが所へ昔の主人澤田

と兄弟せり合其有様娘は何と詞もなく守りつめてゞ居たりける女房の涙ながら見れまへの方から取替さんした金も御座んせう去ながら孫兵衛殿の不性でも如在でもなひ事わしが此やうに長煩ひ人參代や何やかやに身躰のつゐへにて不勝手に成たれい根本をたんだゆれば皆わしがはさ姉の爲に取かへて下さんした金をどうよくに取かへし兄弟のよしみは何んで立と思召ことにあの娘いわしが實の子でもなく義理のある親子の中可愛ろふに勘め奉公とはれまへ爲にも姪ではないか跡先を拵へて能分別仕てくださんせとくどき歎くをしかり付ヤイ爰な大たはけめのけば他人といふ夫婦の中本んの子でも姪でもないあの女らうに何んの義理だて名をとろより徳を取が當世〳〵うぬがやうなたわけ者にはかまはれぬ内へ歸つて後に彌兵衛が戻り時分に又來ふと立歸る表口主の彌兵衛はたと行合親見合てコレい彌兵衛歸れたか些其方に無心が有て參たれ其留守故に戻所遠國ならば明日來ふかと云ば彌兵衛聞てイヤ〳〵少々草臥でも無心とあれば聞捨られず先れはいりなされ承らんと伴ひ内へ入ければ女房娘も悦びて去たより早ひ御下向樂師樣の御利生やら今日は御氣色もかろく心よふ御ざりなしたと笑顔に彌兵衛も機嫌よく早速の驗が有て有難ひ扨源助殿の無心とはどふした事一通り承はろと座に直れば源助はぶつてう顔どふした事とはれろかな事いふまひ

是迄段々催促すれ共埒の明ぬ返事斗けふいこちにもさし詰た入用が有ゆへ取替た金のさん用米やみその指引がしてもらひたさに來ましたどふぞ今請取て歸りたいと膝を組でつめかけたり彌兵衛もきよつとせしが成程其事も我らか如在ではなけれ共何をいふてもなひ物は返しにくい只今といふてゝ猶ならぬとよはみを見せず云返せばイヤ是彌兵衛そなたが今ならぬといふは得て勝手金の代りに何成共有そふな物了簡して受取て歸らふといへ共彌兵衛は氣も付ず金の代りに成そふな物と見らるゝ通り何もなひと云せも立ず源助れ瀧が手を取金の代りは此子じやといへ共彌兵衛は合点ゆかず肝をつぶしてゐたりぬ

二之巻終

第三巻

◎旱魃の雲降て湧た四拾兩の小判

源助がなぞ〳〵をやう〳〵呑こむさらし屋彌兵衛ヲウ扨とそのれ瀧を金の代りとは契情奉公に賣て其金を戻せと云ふ事かといへば源助ヲヽサそれが今合点がゐたかない物を無理とは云ぬ其娘をこつちへ渡せは五十兩には成そふな物了簡して濟をてやろヲヽといふ氣か但しはいやかどふじや〳〵と凸をたゝさせり掛れば彌兵衛もむつとし氣色を損じいかに金を

取替たればとて人の娘を賣物にして五十兩に成かならぬかと相場にかけるさつくはひ千万もふ此上は堪忍ならずもしや大事の出來らは用に立んと嗜置たる金子なれ共娘の身には替られず唯今返す請どれと納戸にかけ入錠ねぢ明其方よりの取替金さん用せよとやつかと座し財布の中より小判の數は四十兩ぐはらりとまき出すを源介みてびつくりし壹匁は扨置壹分も有まひと思ひの外なその小判あまりの事で肝がひしげるそれなればお瀧を賣てやるにも及ばぬいで請取の算用せふと十路盤取て先去年から米やの取かへが四百八十匁金にして八兩家賃の取替が五兩味噌鹽の代が〆三兩壹分薪物が五匁づゝ十度で五十匁四やら入用があるとてかしてやつた金が貳十兩借屋をかつた時何やかやの世話やきちんが壹兩せつ〳〵催促に來ても埒が明ぬに寄て腹がへつて内へ戻り茶漬をくふた事が度々にて雪駄の損じ何かの入用てまかに算用をたら五兩斗も有べけれど是も了簡して三兩貳分斗りで濟してやろ外にまだちよこ〳〵とした事もあれ共妹聟たけにさらりと帳面消して置是迄でさへ四十兩でゝ不足があれ共なひものを取ふといふやうな者でもなひ佛性な此源介ちつ共無理は申さぬと財布取出し彼四十兩をねぢこんで懷中し箪笥すんで嬉しや〳〵先歸らんと立上る不道心彌兵衛夫婦は月夜に釜をぬかれしれもひにらみ付れど手前ゑ何んのひかへもなく借

したと云には詞なく胸なでさすり堪忍の齒をくひしばる斗りなり源介は表の方へ出行しが又立歸り内の樣子をうかゞひて思ひがけのない此金を持てゐるあの彌兵衛何んでも合点のゆかぬやつまだ此外に金を持てゐよふもしれぬど戸口にさし寄耳をよせ息ざしもせず身をちゞめまだ此上にも妹が底意を開んと心を付て忍びゐるかくといしらず娘のれ瀧コレと、樣今の金は姉樣の本望をとげん爲の用意の金何んのヒしが身を賣て成共あの金は渡しとむなひぞふぞ取かへして下せと取付なげゝば女房も不審顏二三年つれそふ女房のわしでさへ今の金のあるといふ事は知らなんだそれにそなたがあの金やつては本望がとげられぬ其上まだ合点の行ぬは姉樣はそなたになび筈今の詞といひ金の出所わしはづんとのみこみませぬコレ彌兵衛殿いか樣な事で有ても兄源介と一所でいなひ子細をいふて落つかして下されとれもさ枕に恨み口實理りと知られたり彌兵衛も去ばし詞なくもく然としてゐたりしが女房にむかひ申けるは只今の樣子を見て不審にれもふは尤大事をかゝへ望みあるれ瀧が身の上外へもれていいかゞと思ひ其方にも隱した譯はあの源介といふ男日頃より欲ふかく道をしらぬ奸曲なる者ゆへ其方が心をも疑ひ兄源介と一所なるかと思ひし故金の有所も知らさずゐ瀧が身の上もふかふつゝをかくしたり此うへはありやうに語りて聞さん元此れ瀧と

某が娘とゐふは僞り誠は大和國の城主奥村家の家老春藤孫之進といふ武士の娘にて本の名は磯野とゐふ姉娘は藤波とゐふて兄弟の娘なりしがいつぞや某が主人濱名の城主より奥村の家へ婚禮の結納相すゝ紅葉とゐふ女濱名より御使にのぼりし節殿中にて春藤孫之進を討て重代の刀を奪ひ取落失たる曲者は何者共しれず其節彼孫之進が娘其場に有合さず此事を聞とひとしく追かけて親の敵を討とらんとてかけ出しを奥村かずゑ殿とゝめ給ひうかつに追かけては仕そんずべしとの御知客にて兄弟の娘を非人に仕立敵に近より本意を遂よと道中の路金何か賄料ととして金子五十兩下され兄弟共に夫より非人の躰に成此國の諸川といふ所あさゝよひしを某用事あつて彼石川の邊りに行しに不思儀の事にて名乘合奥村の家と濱名の主人とは浅一家なれば其家の家來は傍輩も同前樣子を聞て見捨がたく石川の邊にはいにしへの五右工門が流れをくみしぬす人共多ければ五十兩の金子を女子の身にもたせ置ば必定盜賊の難有べしと十兩を姉藤波に且たし殘る四十兩の金子を某預り妹磯野は娘といふて紅瀧と名をかへ某が世話にて姉の役害をたすけまさか敵の有所の知れたる時あは兄弟一所に向ふ覺悟にて我は其方が病氣本腹をいのるといつはり折に付て彼石川へ行姉の安否をとひ妹の事も姉にもらせんはかり事今日唯今打明ていはねはならぬ品に成たるも

あの兄の源介が欲心から猶此事を源介が耳へ入ゝはいか成事を企んも斗られず妹の磯野を契情に賣ては分がたゝぬ故大節なる用金を預りながらかめ〳〵と源介に渡したる某が思案有ての事コリヤ女房兄弟と思ひ心をゆるゑ此事をかならず外へもらすなよと始終の咄を表に立さく源介は肝をつぶして聞ゐたれば女房は猶わきされ果長ひ月日を今まで本のかまへの娘子じやと思ひしが扨てそふかと斗にて或は感じ或ハ悦び女子の身でたのもゑや名もしらず顔も玄らぬ敵を討ふとはあつぱれの孝心男子でも及ハぬ所所やと賛歎するも道理なれ妹娘磯野彌兵衛にむのひわたくしを勸め奉公にやつては本望の妨げとあの金を源介にわたし給ひ外に思案があるとの仰せ其又思案とはどふした御思案それか聞たふ御座りまするヲ・聞たくばいふて聞さんあの五十兩ハ源介にわたゑても百兩貳百兩の金ゑ自由それは又どふした事かとふしんに思ふべし其百兩二百兩乃至三百兩にてもそれがしが家の重代雌狐丸といふ太刀を所持したり今是を賣拂へばもゝくなふて四五百兩には慥に成又所望の人に賣拂へば千兩といふ金はいつでも自由か樣の天下道具なれ共武士のたしなゑゆへ今迄は身を離さず大節に往たれ共れの〳〵兄弟の心さし唐土の賢女に勝る孝順をみては此秘藏の道具もれしからず近々の内是を賣拂ひ入用次第に金子を調へ本望を遂させ申さん心安く思はれよと世

に頼もしき詞のかず〳〵娘磯野は大きに悦び本にれまへはわたくし共が爲には本の親も同前他人が何とてか程に不便は掛まずまひと嬉し涙にくれゐたる表に立聞したる源介始めの樣子雌狐丸の事をとつくと聞ひとり呑こと打うなづき悦びいさみ立かへるかしる所へ奈良のくつ足や提灯どもさせ彌兵衛が内へはつとばりさらまや彌兵衛殿とは爰で御座らか我々は奈良の木辻町天田屋五兵衛と申者ある金買の源介殿の所蔵で此家の娘子を五十兩ゐ買ふ約束則金も持參いたした用意よくば證人請とり金と娘子を引替にして歸りましよと詞もさすがくつはとて馬のはなとくごとくなり彌兵衛出むかひ我らが則さらしや彌兵衛でこざる併其源介が肝煎でも此彌兵衛が合点せぬ事あたまをしゐ金と娘を引かへとはめつそうな事をいふ足ろどんな事いかず共早〳〵歸りやと聽もなくいひはなせば五兵衛むつとしてイヤ是彌兵衛とやらいふ人によふ聞をやれわごりよいあの源助殿に借錢をふて濟さず源介殿の影で身躰をどふやらこふやらくろめてじやげなそれゆへに源介殿の詞とそむく事ならぬとある事なんぱそなたの娘でも我まゝにとならぬげな源介殿の呑こんで合点なればいやとはいはれまひ殊れあたまから此五十両をそつちへわたすはあまりいやでもあるまひと出ぱうだい成詞を聞よりこらへばこそつとよつて五兵衛がはそ首むんずとつかみ人にしられたさらしや彌兵衛存外至極の雜言四も五もいらぬ是がれのれに返報じやと引かづひてどうとなげつくれば溝石にて天窓打足りいたや〳〵と顔をかめはう〳〵逃てかへりけるはや九つの鐘がゴンとひゞくは誰も來ぬとのしらせのかねみな〳〵やすみやと戸口をしめて寢入たる財の音もやう〳〵更わたりぬ

◎欲に目のなひ監人の探り當る妹の異見

道を求る者は其身を安じ財を貪る者は其身を失ふこと歴然たりかくてわか金買の源介我家に立歸り兼てかくまひ置し澤田友九郎が寐所に入りさらしや彌兵衛が胃の物語を友九郎に語り倒とぞ今夜の中彌兵衛が家へ忍びてみ彼雌狐丸と云刀をぬきみ取また外に金を持て居らふも存せず家さがしゝてありたけの物をこつちへ仕てやる了管れまへも共に浮出あれ彼刀さへぬずゝとれば五十年六十年牢入なされても飯米に事はか、ぬたゞ取山の係とゝぎすよひ事聞て來たでは御座りませぬかとにぎつた故にいひければ友九郎つく〳〵聞ていかさま是とうまひせんさくぬす人に成からは忍ぶ事もいらぬれもて向やられしこんで奪ひとらん手向せば一刀にぶちはなすふんの事さあ〳〵明ぬさきに急げ〳〵と俄にいさむ身でしらへ顔をつゝんで一腰ぱっこみ二人づれ八つ過に我屋を忍び出て行さる程にさらしや彌兵衛

は畫の遠道何かの事に氣草臥し奥の一間に唯一人前後もしらず臥ゐたる納戸の内には女房と磯野枕をならべ臥たりしが病の上に氣か、り成事共れもひつゞけて女房は夢も結ばぬ病の床折節咽のかはきければ庭にそろ〳〵はひ下りけれ共長病に足すゝみ行歩も自由ならざればしばしかしこに息をやそみてゐたる所に裏の口の戸をそつとあけのさ〳〵はゐる源介と友九郎はう〳〵内へ忍び入しが燈きへてまつくらやみ兩方それと知らされ共女房足音にれどろき耳をそばだて聞けるゐ咄く聲もさすがは兄弟よく聞知たる兄の聲扨は貪欲に眼くらみ此家へぬすみに來られしなひつとらへて異見せんとためらふ内納戸の方へ忍び行躰を見るよりコレ兄樣源介殿かと聲かけられてふりかへりゃアそちは妹かかならず聲高に物いふなと兄が詞に妹は是兄樣源介殿そなたか何んの用あつて寐しづまつて左のひこみ納戸へはもかしやるぞといはせも立ずエ、聲が高ひ何んの用いなけれ共彌兵衛が宵の咄を聞たる故かく去て置た雌狐丸をぬすみ來た見のがしてぬすまずればよしちつとても聲立ると妹とはいはさぬぞたつた一討にして仕廻ふ命れしくばだまつてゐよとれくをさしてゑひ上るそを取てこれ源助殿扨て宵に彌兵衛殿の咄左を立ぎゝあの刀をぬすみに來たのじやの扨〳〵そなたはどうよくな心トやの他人でもある事か現在のわしが夫妹の男じやないか邪見

といはふか非道人といはふかちく生にれとつた根性わしか見付た上はこんりんざいぬすまず事はならぬ〳〵其心からは兄共れもはぬ妹とおもふて下さるな兄弟の縁きつたと恥しめられても馬の耳ちつ共ひるまずヲ、兄を兄共思はぬ不届者こつちから縁切た爰を放せとふりきるをむしやぶり付てはなさばこそエ、めんどうなめろうめと肩先をふミすゆればつかれ果たる病の上左たゝかあふみ付られてうんといふてたをれしが夫彌兵衛に知せんとかよはき聲を高〳〵とはり上なふ彌兵衛殿ぬす人がは入たり出合給へとよばゝる所を友九郎ぬき打に切付ればあへなく息は絶にけりさあ邪ケなやつは片付たりと二人はそな〳〵はひ上り納戸の口にて立やすらひ聞耳を立あたりを見まはす所ゐ娘の磯野は最前の音ゐ目をさましさぐつて見れば女房れしげもなく裏口の戸は明たり扨はどれどろき臥所を出てさぐりまはれば二人もれなじくさぐり足心はかりのくらがりまぎれあなたこなたと立まふ内思はずあらず友九郎にはたと行當ればア、こいやと逃んとするをすかさず取て引よせそば成圍爐裏の火にて燈をともしかはをみてびつくりしゃア汝は孫之進が娘磯野そなたは澤田友九郎殿かとたがひにおきれおたりしが扨は汝が爰に居るからは姉娘の藤波もゐる筈れや孫之進も入しれず討れしとさけば誰に遠慮はなひ奪ひとつて女房にすると小がいな取て引立れば

337619

コリヤ〳〵源介汝は奥へ忍びこみ雌狐丸をぬすみ取跡より來れ我は磯野をつれ歸り姉の替りに女房にすると望をかけし刀より先さし當て磯野が色に刀の事も打わすれて小脇にかいこみ逃て行磯野と行じとふりはなさんともがく所を源介立より手拭ひ鼻を口にをしこみさあ〳〵はやく落給へ跡は拙者が請取たり氣遣ひ有なとすゝめられあつぱれ上首尾幸と磯野を肩に引かけて飛がごとくにかけ行源介は仕すましたりと悦び妹めは切りころされ娘をは友九郎殿が奪ひ取て歸られたればもふ此上は彌兵衛一人そつと忍び行さしころをふかいやくきやつは手對ひやつひよつとおきてはこつちがあぶなひ生て置ては心がゝりいつそさつぱりころさふかとふかこふかと思案たら〳〵ためらふ所あるとの彌兵衛は夢の内なにとやらん胸さいぎし身うちにあせのながるゝは唯事ならず合点ゆかずとそつと起脇指れつ取身づくろひうかゝひ聞共知らぬ源介そろり〳〵とはい寄て納戸の板戸に行あたりぐわたゝひゞくに身をちゞめ耳をすばしあたりをみる内にソハ誰者ざんなれぬすんならんと主の彌兵衛勝手としつたり茶釜の下くいつともへ立火の明りにて源介を見るよゝうぬすんかと思ひしに女房が兄の源介殿夜中といひくらがりへよふこそれ出御馳走には此早縄しやくはんあれと近よる所をずつぱとぬいて切かくる心得たりと身をかわし火燈のやぐらをれつ取て丁と受とゑはねかへして鋒をやぐらにまとふてぐはちりとなげ捨てつと入て源介がえりがみつかんでかつはと蹴たをし足下にふまへけふの書の無念さをかんにんせしは取替た金の威光借つたといふ誤りがあればこそ虫を死なせて歸したれさもなげれば書の樣な惡口雜言了簡がなるべきか只今こそ汝が絶命何ゆへに忍び入た有樣に白狀せよコリヤ〳〵娘よお瀧よ盗人をと、のへたりはやく起て火をともせとよべ共〳〵音もなければヱヽ是程に呼が耳へいらぬかとつぶやきながら源介をしつかとくゝりそばなる柱おしばり付て燈火かゝげ見る所に娘のれ瀧はなく女房れしげは殺され朱に成て臥たる有樣一目見るより南無三寶仕なしたり不便やと空しき死骸の傍によりかゝる事としるならばやゝ〳〵と殺さふかれそかりし殘念やとしばし涙にしづみけるが女房の敵といひ重々つもる恨みの乃思ひしれとぬいたる刀ふり上て既に討んと仕たりしがいや〳〵おのれにはまだ問事あり娘のお瀧はどこへ往たれのれが知らぬ事はあるまひサアまつすぐにぬかせちつとでも僞とこりやこれじやがと氷の刃をふりまゝせばたすからぬ命なれども愚人の心は臆病にてもしや助る事も有かと思ひ成ほどに有やう申ましよ娘のれ瀧は澤田友九郎といふ人つれて立退れましたわれ〳〵が忍び入たは刀をぬすみとらん斗りの事にて外に何にも望はない妹のれしげ

も友九郎殿の仕ぶさにて私は存せぬ事兄の身で妹をころさふ樣は御座りませぬ命をたすけて下さりませ彌兵衛樣と命を惜しむ追從輕薄彌兵衛打わらひもふそれで娘の行衛も知たれば追かけて取かへし友九郎とやらんも跡からやる死出の山にて待あわせ地ごくの道の連にせよと取て引ふせ肝のたばねをさし通し〳〵日頃の意趣いはれたりとれどり上りてずたずたに切さいなみ家内をかた付それよりも友九郎が跡を去たひて葦駄大ばしり飛がごとくに追かけ行友九郎は磯野を肩にかけて落のびしが源介を待合せんと盛の木蔭に磯野をおろして待あたる所へさらしや彌兵衛一さんにかけ付かくと見るより無二無三に切てのゝれば肝をつぶして友九郎磯野を捨てにげゆくを追かけ追つめ後より力にまかせて切下れと大げさ切こまれ二に成て死でけりさあ仕をふせしと磯野を引立見るに口あ糸ぢわらをこみて物をいとせぬさるぐつはのごとくはたらく物い目斗りなり彌兵衛みて扨〳〵にくき仕ぶさかなと件のねぢ口をばかなぐり捨れば磯野と嬉しさいふ斗りなく始終の事を語りて悅ぶ事はかぎりなし彌兵衛も磯野が恙なき事を悅び此上と河内の住ゐも成がたければ是ゟ直に石川に行姉藤波にあひそも〻を渡し敵を討謀を廻らすべしと磯野を同道して石川の方へといそぎける實に掛橋惣右衛門は晒や彌兵衛といふ名を付町人に成ても武道をわすれず義有て私

なき振廻と賴もゝく覺へぬ

◎月夜に提灯明りを走る武士の情

父の仇には共あ天をいたゞかぬといふ本文にて心は金鐵のごとく謀と孫吳が秘せし万化の術に身を委て敵をねらふ孫之進が姉むすめ藤波は惣右衛門がはからひによつて妹磯野にわかれ河内の國石川郡に姿をやつし非人と成往來の人諸方の群集に立まぎれ或は人の門立て一飯の飢をしのぐ躰と成野に臥山に伏て心を盡すあり樣女ながらも男まさり才智勇敢又有まじき娘なり石川屋濱の眞砂は盡る共世にぬず人のたねは盡せじと詠し所はかいれ共名の似たるしるしにやよりけん此所にも盜賊の數おほくて女の身の大望をかゝへ拾兩といふ金子を懷中せし事なればもしやわる者の目にかゝり思いぬ災難も出來らは折角心を盡せし父の敵を討妨げにもなふんかとおんじる程夜も寢られず殊に敵の有所も知れずいかゞはせんと思ひしに頃ゝも今は八月の中旬にて山城の國八幡の淨利生を賴みいかにもして便もなく此事をいひやるよすがもなく面体をもしらぬ敵の行衛を尋ん事われ一人してもかなひがたく何卒妹が方へ知せたい事かなと思ふ甲斐もなかりしがさつと思ひ付けるは掛一惣右衛門殿妹を連て行れし時若も不慮に所住をかへば其所の木に成共石に成共しるしを書付て立

退べきといとれしい玆の事とふところの袋よりやたての筆を取出しそば成辻堂の柱に山城國　幡の方へ立退くと書付てそれよりも只一人石川郡を立出道〳〵乞食の躰にて急げるが程なく八幡山の麓に着てかなたこなたを見廻す所にげにや名に〳〵あふ放生會の賑ひ都鄙の貴賤袖をつらねて參詣の群集にぴたゝしき中に供人さはやかに召具したる武士の年の頃三十斗成が床几にかゝり四方を詠てゐたる躰たゞひなき美男にて今宵い此山に通夜せらるゝと見へて暮るゝふもかまはず三井寺の謠をうたひてさもゆふ〳〵たる有樣を一目見るより藤波がぞつとしみ付戀風のいかしらぬ共扨もうつくしき器りやうとても殿御を持ならばあの樣な人にそふてこそ女の身の仕あいせなれとしばゝ見とれてゐたりしが我身をそれば襤褸どんぼの非人の姿ちよつと一言物いふ事もならぬ身のしだらぼんに又の事をふもはずばかないぬ戀もかな書にてゐもひのたけをしらせん物をと獨ゆこかるゝ胸の火をふさへ兼てそばへより中殿樣下さりませとしたゝるひ口本にていひけるを家來の者共とがり聲してヤア慮外なり非人めむさい形て旦那の前へならぬ〳〵壹錢も持合せなひはや〳〵そこを立てうせひと目をむき出して去かり付ればアイ〳〵といひながらかの侍に目をのよとしれもひゐる身の穢にあらはれたちかねて見へければ家來の聲〳〵いかつげにヤア推參なる

非人め女とれもひ宥免すれば付上りあたいやら去ひつらつき目に物見せんと立さばくを彼侍去ばしとれさへ藤波が顏をつく〳〵と見てフウ其女の非人は外の非人と違ひれもざしの去はらしさいやしからぬ生れ付何ゆゑの乞食ぞや町人の娘か但しは武士の牢人の娘かとはれて何んの返答なくさしうつむきしが顏をあげて推量の通り腹からの賤しひ非人でも座りませぬどちと譯有て此姿に成下つてはゆへ共れ侍樣でも非人でも戀に隔てはなひ物とやむかしの身ぞならば旦那樣れまへに一と云いひたひ事が座りまずとねぢよりすり寄ての侍が刀をふ去ぞそふに目もはなさず打守りしが思はず去らず床几のそばへかけよるをはつたとにらみヤアこいつ曲者某が詞に付入この刀を念がけるハ扨とれのれは明及ふ京中に徘徊する書盜どやらいふぬす人よなまつ二つに仕てくれんと刀をつ取立上れば家來もはらりと取まハす彼非人ちつ共ひるまずイヤサ其刀に見所あり今一目みせらるによといへば侍打笑ひ某ハ小鹽辨次郎とゆふ武士なり此刀に見所ありとは肝のふとひ女めれのれが詞にれそる〻にてはなけれ共みせずにれかんもれくれたるに似たりサア何んの爲の見分能みよとさし出せばとつくと見屆扨こそ〳〵年來心がけしれやの敵遁しはせじと猛但より一腰ぱつこみ切てかゝれば辨次郎聲をかけコリヤ〳〵女親の敵とは此方に覺へはなひ卒

柳生弥次ゑ
刀のつらこーらへをこせる
姉ふどふみ
こもをつゝみし
刀
打ちくる
ひさんの女めまり
いづかめぬき
お見まり
おやの敵
のがさめぞ

いそのゑ
弥兵へ
吉九郎
切る

忽するなといひければィヤ覺へなひとはいはせぬ證據は則此刀目貫は赤銅のかぶろ菊綿かしらは千どりの摸樣を金と銀との彫物鍔は信玄鍔に雪のすかし父孫之進殿秘藏せられし刀の拵へ一目みてもまがひなし父を討て立のき刀をうばひとりしは其方かをづからこそ春殿孫之進が娘藤波といふ者れやの敵を討ん爲妹と一所ゐ非人と成て付ねらふ折ゐるふ妹は居合せず父の敵と生顏をもみずみづから斗り本意を遂ばさぞや無念にいれもふべけれ共たま〳〵出合しれやの敵見のがしはならずサア辨次郎とやらいふ侍尋常に勝負〳〵とれもひ詰たる眼ざしとや切かけんきつそうなり辨次郎手をあげてア、是〳〵扨い其方は奥付の家老春殿孫之進殿の息女よな此刀をみて某を親の敵と思るゝは尤ながら某とそもじの父孫之進殿とと鎌倉參勤の砌心やす〳〵語意輒遺恨もなき中なれば何故に孫之進を討て刀を奪ひ取立退べきぞ此刀の緣頭鍔に至る迄ことん〳〵く小道具やん買求め某が家に傳はる來國行の刀を拵へて指領と仕たれば此刀の銘にて盗取ぬといふ證據は分明其方も武士の娘殊に刀を目當にする親の敵なれば父孫之進の指料の刀は何んといふ銘といふ事は合点の筈サア此刀の心をみせん父の乃か吟味せられよと目釘を拔て藤波にみすれば藤波そばに立寄て刀のかを見るに槌目も違ひ銘は來國行とあり〳〵とやり付たり藤波も扨はと驚きゐたりしが此又刀の小道具は何くの者の手ん求められ去ぞ證據はいかにととひかくればされば此小道具を求めし去年の夏京都ん來る小道具や團四郎といふ者の手ん買もとめ則金子請取の一札懷中せりと鼻紙入よりくだんの請取を取出し藤波にそれば團四郎が金子の高〆五百目の請取まがひなし藤波も辨次郎が證據をそて詞もなくてゐたりしが此上はれさへの身に疑しとはれたり此小具やこそ心得ぬものなればもしや敵が小道具となり團四郎と申も存せず是より京都へ立こへ小道具や團四郎をたづ絲實否を糺し見申さんといへば辨次郎も打うなづき成程此團四郎といふ者が敵にて有んもしれずひそかに尋ね寄て有無をたゞし本望を遂られよしのし卒忽にてい不覺を取んいよ〳〵此上も非人となり若團四郎にたづね逢れは知略を以て敵といふしやうこを見付本望をとげられよ人違しして仕損じゐるな某もそもじの父に去たしをれば如在にと存せず助太刀を仕てうたせたけれ共女の肩を持て助太刀せゝ色にふけりての仕わざと後日の嘲もはのゝなれば某は知らぬ分なり家來も此事沙汰なし口外へ出さば曲事といひ付て藤波にいとまごひすれい藤波は嬉しげに万事は重て御禮申さん先〳〵都の方へ片時もはそぎ申さんと又其所のさくらの木に印を書て九重の空人とたち別れぬ

三之巻終

第四卷

◎地獄で佛に愛敬のある亭主が情

斯て須殿九八と一とせ春殿孫之進を討〻刀を奪ひ立退しより四海廣しといへ共身を隱に所なく所々方々をさまよひてあるきけるがいにしへ四條川原の住ゐの時わる者仲間に知音れはく牛は牛つれとて同類をかたらひ人の群集する所にて巾着紙入をぬすみ取る業をしらず是ほど能商賣はなひ本手いらずに人の物をたゞ取事廣ひ世界に又と有まひと無分別の手極を悦びける淺ましさいか樣笠の臺のはなるゝ迄は止まじき躰とはなりぬ爰に小道具や團四郎といふ者もれし出して巾着きりとはこへね共内證と直からぬ見る者作り其頃京都にさたのある男なりけるが一くはん町といふ所に刀脇指の小道具見せを出して古道具取あつゆ家相應に賑なる見せさきにわらんぢをぬいでさやはんの紐をとく〻たらひに足をさしこんで洗ふ所へによつと來ると須殿九八例の頭巾にてかほをかくしそつと入れば團四郎見てムウ何九八か久しうあとぬがまめそふな某もたつた今上らがけ咄す事も有上へあがりやといへば九八もムウ今戻つたか扨々それい定て草臥ちつと咄す事有て來たれ共戻がけならさぞ草びれ後お咄すといろりのそば横にころりとねたらばふてぞのたりける團四郎聞て咄す事

は皿の事能事ならぎゑん直しに早ふ聞たひ今度の田舍下りい商ひはなく八專やら天一天上とやらで降つゞき川〻の水が出てあるき渡りの所も舟渡しの川でしの何んのかの　役にも立ぬ錢が入てさん〻の仕合天道人を殺さずとは嘘の皮天道のゆ影で大損に逢ふたと出はふたひなる無法の詞九八聞てチ、それとさのどくわれらも此頃い仕合わるく能にも逢ぬそれに付ちと其方に無心が有と風呂敷包取出さ前に置コレ此中に有は彼内〻咄して置た大事の刀あをひ下坂といふて今天下お二振とないきれ物故大事にかけて身をはなさず誰にても望人あらばうりはらとんとは思へ共何をいふても此姿で賣ふと云てい買人がなひ第一根がぬすみ物ゆへあらはにも仕にくひ貴殿へ是を預り田舍下りに大名方のつてを求めてうつてくれらるればいつかど代金をしてやるはたらき代は相應に損はかけまひどふぞ賣てもうひ急に金にしてほしひ拵まとりの小道具はいづぞや金の入用の時賣てもらふたが刀は今まで持てゐたと風呂敷包を打明て取出し團四郎に見すればムウ此刀はいつどやの咄の刀あを井下さかたれば音に聞たされ物成程思ひ當りもある置て歸られよ外の事と打やつて成共此刀さへ賣拂へばえつかりとえた代金はたらき代も是相應合点なら預かろといへば九八打うなづきそれは氣遣ひ無用望人があればとした金ではないずつしりとした箱入の小判ごらく

とした古道具よりたつた一ト度びて大分の元手金が手に入家屋敷を買て商賣を替質屋か酒屋か呉服屋かと山もみへぬ心のそろばん味ひ事いふ中を取てイヤ〳〵手近ふ米屋に致ふ米や〳〵と悦ふにだ九八も圖にのる十面顔われらは其時兩替屋に成申そ打てれけしやん〳〵と二人が手拍子聞へてや女房小春子をふとところふいだきながら寺參りの歸りがけ是いしたり珍らしひ九八樣何事やうそやん〳〵とめでたさふな御きげんと樣子をしらぬ調なれば團四郎打笑ひコリヤ小はる急に德利を持て八文が買ふて恋いめでた酒を振まいんと錢箱の鍵をならせばイヤ〳〵酒は無用晩にと大分用もある必今のを賴むぞと風ろしき包を殘さ僅九八立出歸りける何心なく女房小とるい殘りれふやといひつ〳〵も早暮むつの鐘のひゞきにぐいたひそと見せの戸をさして内へ入らんとそるうしろに女の非人か立やすらひてゆれ内義樣ちと物が尋ましたふゆ座りますといふに女房れどろきてくらがりからつきしれもない乞食尋たいとは何事あつちへゆけどひつしよなくいひければ其御しかりは御尤私い此あたり始ての乞食ゆへ不調法と御めんなされて下さりませちと樣子有て尋る人が御座りまと詞の品のしはらしさに女房もふしんに思ひ非人の顔を打守りつく〴〵と見とれてどふやら聞た樣な聲ふしぎな事とそばへ寄うす暗りに貌付みれば見る程よふ似た人やとためつす

がめつするを彼非人も女房が顔に氣を付能々みれば國本にて育上し乳母のれ谷なればはつと斗飛立嬉しさすがりよらんと仕たりしがいや〳〵今の世の人心油斷ならずいか成者の女房と成なを中名乘たてせば本望のさまたげ共成もやせんとわざとそしらぬ顔付にて申御内儀樣此あたりゐ古道具やの團四郎といふ人は御ざりませぬか御存ならばれしへて下さりませといふに女房びつくりして其團四郎殿とハてちの夫何ゆへに非人の身で尋るぞどふした事とよく〳〵顔を打守りゃアれ前は春藤孫之進樣の娘子藤波樣では御座りませぬか私はれまへの乳母れ谷で御座ります十四の御年で御目かれ申せばよも御見わすれは有まい今年で丁度丸五年れ久しぶりやゆなつかしやとすがりよれば藤波もつ〳〵むにもつ〳〵まれず成程れれは藤波そなたはれ谷これは〳〵と斗にて互につもる床しさと恙なき悦び涙をばし袖をぬぼりける内にい主の團四郎我名をよぶ非人の女殊に女房とすみ〳〵をたるを合点ゆかずと行燈を吹消て二人が咄を伺聞かく共ゑらず女房れ谷思ひもよらぬ此御姿又御樣御年寄の御牢人ても遊してか御妹子の磯野樣と何とならせあひしぞや私は御家のゆ恩を受し身なれ共かゝる詫しゐ住ゐを致せば朝夕に家業に取まされ今てはれとづれたへも得致さぬ是に付てもゆ袋樣の御事が思ひ出され一入ゆいとおしう存まそるとにもかくにも淺ま去ひれまへの

汚姿合点がまいりませぬは譜代の孫之進様たとへ御流牢なされたとて非人迄に成下りはなされぬ筈但はれまへひとり色事故當世にてやる欠落でもなされまして此御姿お成のふのとあまりの事に興さめ顔にてあされたる体もことばりぞかしふじ波もれ谷が詞の數〳〵に打涙ぐまてゐたりしが自此非人に成たわけは父孫之進様の敵を討ん爲姿をやつし此有様必ず〳〵他言は汚無用乳母といへば母様もれなし事と思ふ故様子をつゝまず語るぞや共〳〵お力と成て敵を打せてたもひのといへばお谷いびつくりまてヒヤア何父汚孫之進様は討れてれはてなされまか是と〳〵と斗にて思ひよらねば二度の仰天まはし詞もなかゝしがして先其敵の名い何と申者所はいづくいか成者にてゐぞとどひければされば の事其敵の名も何と云者やら本より何國の者ぞといふ事はしゝね共父上を討て立退し時父上重代の刀をぬすみ取逃失たれば此刀の有所が知れるならば敵の有所も知る道理と思ひ第一は刀の吟味そなたも今から心を付思ひ當りも有ならば知せてたべと有ければムッウ扨は孫之進様を討て刀を奪ひ逃失てゐなれば必定盗賊の仕ぶさと存まするうれに付私が夫い小道具屋の團四郎と申て刀脇指小道具の商賣を致せば此わけを頼んでも見たけれ共平生わる者の付合ぞふした心有ふも存せずア、どふがなとあんずれはいや〳〵夫とて汐断ならず聊爾にてなきい無用そなたの心で何事も能いやうに團四郎とやらにいふてたも去るころそなたの夫團四郎小鹽辨次郎といふ侍に刀の小道具を賣つたげな其刀の小道具を見れば皆父上の刀にかゝゝらし小道具なれば團四郎が先うさんくさい若も父の敵ゐきいまらばそなたの夫じやとて用捨はなひ詞て父に手向ぞや但しそなたは我々をみはなして夫に付心かといいれてれ谷が是とれまへのまはり氣夫團四郎は其様な刀を持て歸られし事もなし何事によらず私につゝまず語る人なればよもやかくしてゐられぬ筈で御さりまするといへばいや〳〵大事のわけを女房なればとて卒忽にはいはれぬ事刀の道具が有からはどふでも烏乱者と合点せねば然らば私夫の心をさぐりまてひそかに御しらせヤべしおまへい先々御歸りなされませといへとヲ、たのもしひ眞實とみへた然らばようきに頼むぞやと立歸らんとする所を内より團四郎聲をかけコレ〳〵先御待なされ様子を承りて驚き入たり女房小はる内へ御同道申せといふに二人いびつくりしながら打つれて内へはいりぬ團四郎膝波に打向ひ扨いそなた様い女房小春が以前の御主にて乳を上し娘子とや最前の御物語を承れば山崎邊の侍辨次郎といふ人に刀の小道具賣たるを証據に某を親治の敵と思召すは尤ながら其辨次郎殿に賣たる小道具はさる者より頼まれて賣拂ひひへ共いづくいか成所より出たる道具やらん其出所はかつふつ

存せず某が商賣は家物と元より人が頼めば賣てやるが家業なれば盗物かぬすみ物でないか慥な事は存じませぬしかし女房に縁の有御方殊に其樣にいやしひ非人と成て敵を討んと心をつくし給ふ心根がいとれ去ければ小道具を賣たやつを引とらへて吟味致し若誠の敵に極らは此團四郎が後見して討せません必ずさつかひし給ふな女房がむかしの礼主なれば某が爲にも御主同前れき〳〵の御息女の身として遠土にさまよひ父の讎を報せんと思召こそ神妙ゐ存じひと世に頼もしき團四郎が一言に藤波も安堵の思ひ女房小いるも夫の心の親切に悦ぶことは限りなし藤波重ねて申けるは自が妹磯野といふも敵を討んと一所に國を出去が子細有て大和の石川といふ處にて別れそれよりは音信もなく心元なふ思ひます今此所へ自が來りし事は相圖の印にてしれる筈なれば尋て來ふも存せず親の敵を討共兄弟一所と云かとしたれば何とぞ今去ばらく待合せ妹と一所に本望が遂どふ思ひまするとあければ團四郎聞てそれはいと安ひ事某がのゞ込上は十日廿日此家に忍ばせ置ん妹子が尋て御座つた上敵の實否を糺し申さんいか樣同じれやこの敵を姉御斗の手柄にならば妹子はさぞ無念に思召ん心置なく我等が方にて待合給へそれ女房與へ伴へ御時分もよかろふ茶漬でも進せてゆつくりと休せよとをく底もなき挨拶に女房藤波が手を取て夫の心とあの通り必ず御遠慮のなひ事こちへ御出なされませと伴へばやぶれた姿を其まゝに與の一間に入けるは地獄で佛にあひしといふもかゝる事をやいふべけれ

◎子に甘ひ爺れやの分別い此世をさる智惠

及の錆は及より出て及を穢し人の不善い其身より出て其身を損ふ故に君子の已を敬む事密にして又嚴なりされは團四郎い藤波をかくまひ置次の一間を去つらひほうぐ張の障子にてかこひ人目をふせぐかくし所を拵へて念頃なる饗に藤波も心とけて四五日日數を送られける然るに團四郎と須藤九八が頼み置し刀を賣拂んと田舍の方へ出行しが道にて須藤九八に行逢ける九八見てコレ〳〵それへ行い團四郎にてはなきかといへば團四郎ふり歸りフウ是は九八か此中久しく逢ぬが息災そふで先大慶扨彼刀の事田舍の去ゐ屋敷へゐ目にかけ大方談合も成そふにて今も其事に付屋敷へ行それに付其方が身に付一大事の事が出來た此事も咄たく逢たふ思ふたか幸〳〵近ふよれと小聲に成此五六日以前に女の非人が來りしを何者かと思ひしに春藤孫之進とやらいふ侍の娘にて親の敵を討んとて方〳〵敵を尋ねる所に我等が女房小とるはむかゝの礼谷といふて彼娘の乳母にて有けるよしたがひに名乘合我らが方にかくまふて置たり此娘は見る所が殊外淑明者にて敵の名も知らず所もしらね

共其敵が奪取しいあを井下坂といふ名作其刀を目當に敵の實否を糺ずといへばわざりよが此度賣てくれよとはひしはあをひ下坂なれば春藤孫之進を討て刀を奪ひ立退しは其方か但しは人の重寶にする物と見てぬすみ取たるのか人よりもらふたかひろふた物か其わけが聞たひといへば九八聞て打れどろき成程其春藤孫之進といふ者と過し頃大和の國にて討て立退たが宣趣遺恨にてもなくきやつが所持したる刀がはしさに人をれず切殺したり其孫之進には男子とてもなく娘斗なれば親の敵といふて付ねらふ者は有まひと思ひしが娘の身として扱〳〵きつい女めとかく其分に仕てれかば芋がらで足をつくと云事も有ば氣にかゝつて夜が眠られず某は是方直あ其方が宅へ往て其娘を切殺して埒明んといへば團四郎聞てそふ有ふと思ふた事をかし其方一人しては女房小はるも娘が味方なれば心元なひ我らが思案に い先がの刀を首尾よふ賣て仕廻立歸て女房をたゝし込内證にてさし殺せは路銀といふて懷中した銀迄してやるあら立て世間へしれては某迄がめいわくとかく女房さへ得心すれは鼠を殺すか安い事といへば九八悦び其方が同心なれば手間隙いらずに殺し安ひよひ樣あ願むと〳〵いはせも果ずハアテ頼まいでも殺さねばならぬ女ながらもとふした知寄をもつて親の敵其方を討ふもしれぬ其時と彼刀の僉儀賣た其方より世話やひた某が首がとぶ人の事

ではない身にかゝつた事じや氣遣ひするな急ひで刀の埒を明て歸らんと立出ればヲヽ日頃念頃に仕た程有て頼もしひ男氣其刀が賣れたらば代物ハ半分わけ此度の恩返しこんだ〳〵と詞づ免して二人は左右へ別れ行かくて其日も七つ下り團四郎が留主になりければ女房小はる德松といふ三つに成子を寐させ置てふじ波がそばに寄出妹儀野樣の御出がれそいに付て此樣なせばい所へ置まして嘸御氣がつまりましよ去ながら大事の御身なれば世間廣ふかくまひます事も人のみる目を憚りて御痛はしう存ますれ共心の外のぢじよさいに成ますといとしみ〳〵としたる女房が詞にいやゝ〳〵五十日でも百日でもかふしてゐるとて何んの苦勞に思ふ樣ハなけれ共兄弟一所といひかはし片時もはなれぬ姉と妹が今別れてゐればとふかこふかとあんとるあ妹が身の上そなたがつれ合團四郎がいかひ世話禮は詞あ盡されずと涙さきだつ藤波が袖をひかへて女房小はる申藤波樣あの團四郎といふ人は私がつれあひながら常〳〵わる者斗を友達にして仁義やら情やらわきまへぬどうよく人ゆへゐんぐわいな繰を組し事の悔しさけふはひまを取ふか明日は逃てのこふかと思ひしと幾度なれどなじむにしたがひにくひ半分はとしひ半分思ひ切て退れもせず一日のび二日のび今迄そふでゐる内に此德松といふ子をもふけ子にひかされてをんなぢうする所にれまへに思ハずれめにかゝ

り夫の心をはかりかね若どうよくな情なひ事もいはれふかと思ひの外の情ある詞此間のもてなしと神佛の御かげて性根も入なをり養ひ君の御用に立て嬉しひとは存ながら又此上に日和が替つてどの樣な風が吹て來ふやらと朝夕の心ぐるしさに前もかんまへて御妹子の御出迄は何事も御油斷なく御心を御もるしなされますな團四郎の内にあられぬ時れまへにいふてれこふと存ぜましたが幸けふは何やら用が有とて田舍へ參られ歸りも定めて遲からふ酒でもちつと御氣ばらしにと心は深き德利の中神棚へ御神酒の餘り首尾よふ本望とげぬふやうに武運を守りの八幡樣のお神酒目でたふ一つあがりませと盃そはへさし出ぜ肴は何も沒座りませぬが是でなり共有合とはげた重箱に芋とこんにやくの煮しめも鹽のある女房が心遣ひしばらく時をうつしてさいつさゝれつ藤波が下戸なれ共心ざしの酒さかな八珍の馳走が實有中の酒宴たのもゑく風味有とい見へぬかゝる折ふし表の戸をれしあけて立歸る團四郎が足音しければそりや團四郎殿が歸られたと酒肴德利を片付て障子れし立次の間へ出てそゑらぬ顏にて夫にむかひ思ひの外れそかりし故日いくれる道の程心元なくあんじまして沒座りますといへば團四郎機げんよくつね〳〵旅を家として夜じや晝じやとくふわかちなくあるきつけた德にと夜の道じやとて何共思ハぬ實に世話にもいふごとく旅は道つれ

世は情とて世間に兎はなひ物むかしの歌に世の中はいづくもれなじ旅の空人の情を我宿にしてと詠し歌の心のごとく何國を我宿と定め我家と定られぬが人間の身の上なれバ唯人の情をたのみて我宿とすると詠れかれたれば人ハ情とハふ物がなふてはならぬ事イヤそれに付かくまひ置し藤波殿はもふ寐てゐらるゝかまだ起ていらるゝがといつになき係やく〳〵きげん情有詞のはしゝ女房悅び成程れまへのれつしやる通りまさかの時用ゐ立が人の眞といふ物おまへの其情有ゐ心が藤波樣のいかひ御仕合きつひ沒悅で御ざんする追付敬をれ討なされたられまへにとたんと禮をいはねばならぬと先ゐ先にとて仰られました此上ながら藤波樣にれ力を付てしん世て下さりませといへばヲ、サ何が扨ぢよさいないもふ夜もふけた德松が風ひかぬ樣にゑてはや休みやれもしばらく看經してから跡から寢よといふに從ひ女房小春はそれならばわしは先へ休みまずと一ト間に入て德松にそへ乳して寐てみても寐られぬまゝに思ひつゞくる蒲團の中夫の心の善惡を辨へか係てそつと起障子のすきゐそつと覗は團四郎は尻ひつからげ戸棚の中ゐ脇指を取出し腰にぼつこみ鉢卷ゑ免て藤波がふしたる一間の下屋へはいるを女房はみるゐびつくりゑて扨もれそろしき心かな自ふ實ある躰にみせかけて油斷させ藤波樣を殺し懷中の金ぬすもふと云事か但しはわる者ゐ賊ま

れてのあの仕業か日頃の心とちがひあまり美しひ情ある詞の數〳〵合点ゆかずと思ひしがあの躰をみては夫と頼む人あわらず添てゐて益なき事親の影で此子迄いか成罪にあはんもしれず不便なると此德松とあまりの事に伏まろび聲をも立ず忍び泣余所のミる目も哀にぞ見へぬいや〳〵泣てゐては藤波樣の御命があぶないと一間の障子をそつと明藤波ゆすり起せば何事にやと藤波も驚きければ女房小はる耳に口をあて〻ちと存る子細あればはや〳〵爰を立退給へとあはたゞ云しけに呵ば藤波も肝つぶして何故に立のけといふぞとふしんがれ〻コレ〳〵其譯を申内にはれまへの身の大事が有る樣子は跡でしれる事先々はやふと着物打させひつ立裏道ゥはや落給へわるひ事は申さぬとめつたにせければ藤なみも子細あらんと身拵しやコレ小はる事ねて逢ふ迄隨分無事でゐてたもといふ間も氣のせく女房が心はつき鐘はや鐘の暇乞もそこ〳〵に手を引張へれしやればさらば〳〵も呵聲行衛も去らず落て行女房胸を撫おろさあ心安ひ此上は夫の惡人にあの子をころさせ手もりを喰せたらば先非を悔て善心にひるがへる事も有んと思ひければ寢入たる　松をそつといだき藤浪が寢たる床の上に寝させふとんを着せてそつと立のき樣子を伺ひゐたりしがたつた今親の手にかゝり殺さるゝとも露しらず能寢入たる事のかはゆさ惡人の子と生れしは過去の因果か

報ひかとそゞろにかはひさ身にしみ〳〵忍び歎く折からに下屋めき〳〵こぢ放し下よりつき出す刀のきつさきひらり〳〵とひらめくにぞ女房はとあ〳〵と覺悟しながら我子の命今が最期と思ふにぞ胸せまりし悲しさに念佛唱へて見る内に氷のきつさき德松が脊骨をかけてつき通せばひつと一聲其儘息は絶にけりあすましたりと團四郎そつと這出件の死骸をかくさんとふとんをとれば南無三寶藤波にはあらで我子の德松朱に成て死たる有樣をみてさすがの團四郎氣も狂乱立たり居たゥ身をもがき女房ゥぞこゐゐる小はるはどこにとかけまはればアイ爰ゐ居ますとなく〳〵出るを取て引ふせャァ藤波とぞつちへやつた何ゆへ大事の德松を殺させたエ、につくひ女めとたぶさを兩手にからまきて打すへ〳〵責さいなむ涙をねさへて女房はあの德松はこなた斗の子ではなしひしが爲にも眞實の子なればかゝひさも不便さもなんのこなたにれとろふぞ其かはいひ大節な子を殺させたは義理と云にせまりしゆへコレ團四郎殿宵の詞に旅は道ずれ世は情と其口からいふた舌もひかめにあの大事の望ある藤波樣を殺しわづかの金に義理をわすれ非道な心で身の行すへがよからふかと思召か果は天のいかりにかゝり人を殺した大罪磔の相伴にあはそふ今爰でこなたの手にかけて殺したいこなたいとしさあの子がかゝひさひしも分別極てゐる邪見非道な夫にそふわ

れもしろふなひさあればとて外へ嫁入し二度の夫を持氣もなひ德松を殺させた暇いせにて私も一所に殺して下され團四郎殿と恨みつくどひつ伏まろび前後ふかくに泣さけびければ團四郎もうつどりと至極の道理に詞なく始て夢のさめたるごとく持たる女房がたぶさをゆる免膝を組で拳を握り大の眼に涙をうかめさしうつむひてゐたりしが膝を打ていひけるは誠に鹿を追ふ獵師は山をとず蟬をねらふ蟷螂は後へをかへりみずといふは我身の事今思ひ當つたり某も木石ならぬ身なれば物の哀はよくしつたれ共あの德松といふ子が出來たる故欲心が深ふなり成長させて人に劣らぬ藥花にほこらせ我こそ諸人ゐこひかゞみ賤しひ取賣の家業をもる共德松を富貴な身にえて諸人をはひかゞませんと思ひこみえ方惡念がこり塊人の物を見てこ金銀にかぎらずはしう成たはあの德松が爲を思ひ過した親の因果兼好法師は子といふもののなきこそめで度れと徒然草の詞書にのせられ聖德大子は孫子孫なき事を祈がひ給ふと聞しが子のかはひさに惡黨者にまじはり金銀をむさぼりし天のいかりは目に見へずかはいひと思ひえ子を手にかけて殺したは人をころさふと思た眼前の報ひ冥罰のおそろしさよ今より心をあらた免善心に立歸り我子の爲父母の恩を報せんと髻ふつゝとれし切れは女房も涙をれさへて其れ心を見て恨もはれて但しも滿足二度夫を持ぬ證據是見ぬ

へとれなしく黑髮をし切て心殘ぬふうふが有樣惡に强は善にもつよしと思ひきつたる出離の程ぞ賴もしけれ早明方頃に成ければ表の戸をた、きて掛橋惣衛門妹娘磯野を伴ひ尋來り物申さんといひいるれば夫婦驚き德松が死骸を片付泣悲かくえて出向ひどなた樣ぞととへば我らは遠國者成がちと御尋申たゞ事有此家は團四郎殿と申げなそれに付此間藤波と申女此所へ參られし由我〳〵と其藤波に風絲の若ちよと逢して下されひといへば夫婦は顏見合子細ばゝはれず返事にあぐみてゐたりしが女房小はる心さかえくつゥ其藤波樣はちと辭わつて淀の方へ御出なされたれば爰にて御座りませぬ淀の方を御尋とゞへば扨は此所にはゐられぬかそれいとふしたわけで淀へは行れしぞ女の身の心元なえ樣子をいふて聞されよと根問葉向團四郎も心案を極め是には樣子段々有先内へ御入なされよといふに惣衛門も磯野も樣子を聞迄は心れちずサア〳〵早ふ聞たしと股引ながら刀ひつ提磯野を伴ひ内へいれば女房は一ト問をえつらひ塵をはらひ先こなたへと請じ入れぬ

◎非人の心胸から見へぬ山崎の下向道

思ひ内にあれば色外に顯るゝ理り團四郎夫婦が有樣自然と顏に愁をふくゝを兩人共に髮を切て證心の躰惣衛門合点行ずと思ひ前後に氣を付て樣子いかにと聞いさりぬ團四郎聲を

ひそ先て申けるは先頃文の非人一人來り某を尋らる、樣子いか成人ぞと思ひしが是成女房が爲にハ以前の御主にてたがひに名乘合ての〳〵方を待合せ度との仰ゆへ某が方にかくまひ置てひしが我らが惡心によつてかの娘子を害せんといたせしを女房が眞節にて娘子藤波樣を落し參らせ我子の德松といふ子を我らが手にかけさせ娘子を助し事共を委く語れば女房も涙ながらに申けるは私はあの藤波樣の乳母にてハひしが思はすも卿目にかゝりて嬉さ非人と成父御樣の敵を討んと思召御心のけなげさあつはれ乳母が育て上參らせし程有と我ながらの悅び此所に忍せ置れ妹御にハ逢なされ御一所に敵を討んとの御物語めぐり逢參らせぬるこそ幸なれ此度の御用に立んと思ふに付夫團四郎殿の心をてかりかねハひしにたのもしき詞のはし實と思ひハ所にか樣〳〵の次第にて惡心とみたる故娘子藤波樣はひそかに田崎の方へ忍とし參らせハ跡我子の德松夫の手にかゝりてあへなき最期死骸は爰にハと件の德松かむなき死骸を取出して惣右工門磯野に見せ夫團四郎殿も我子を殺せし悲しさにたへかね發心してあの姿わたくしも共に髮を剃て後世菩提の道に入てハと有る事共をくゝしく語りければ惣右衛門も磯野も肝をつぶして扨々そなたの心底子にかへて藤波を助られし事比類もなき忠節祿を給り刀を帶する武士も及ばぬ節義々と或はかんし或ハ悅び

藤波殿の身の上にいか成事もあらんかと氣づかひせしが今の物語を聞て安堵の思ひ淺からず歎賞してゐたりしが此上は山崎の方へ尋ね行藤波殿に磯野をもたし兄弟一所にして追付本意をとげさせ申さん是迄の御介抱忝しと一禮のべて立出れば團四郎惣右衛門に向ひて申けるは御兄弟の敵い某推量仕るに此邊に徘徊する須藤九八と申者にてはなくハやどいへば惣右工門も兄弟も敵の名を何と申か存せぬ共家に傳る刀あを井下坂といふ刀をぬすみ取しゆへ其刀を證據に尋るといへはされはの事で御座ります其刀を持來り某に賣てくれよと頼んだるは須藤九八と申者此者の方へ手引して討せたくい存れ共元來此九八といふ奴住所を定す雲介同前の身持なればいづくとさして尋がたし身のまはりを拵へて奉公に有付んと兼〳〵申ハへばいか成大名高家へ奉公に有付しも存せずとかく山崎邊に滯留して御兄弟心を合せ本望を遂給へ某も陰味かたと成敵九八を尋出しせんぎ仕らんと存れ丈髮を切て殺心したれば法師の身御供ハ致しがたし去ながら御心得の爲ゆ咄し申すると念頃にいひ含めければ皆々悅び其九八と申者こそ疑しけれ片時も山崎の方へいそがん御暇申と立歸りければ女房もつきせぬ名殘をおしみいとま乞してわかれされば神はうやまふによつて威をますとかや山崎の若宮八幡宮と申せしい靈驗あらたにまします故近郷の諸人あゆミをはこ

ひ月々十五日の參詣とし合せり合土氣のとれぬ垢ぎれ足にしゝ袴を着し耕作をやめて參集る百姓の内にも志や敵にも合事もやと藤波は女非人に身をやつし淀堤の片影に身をひそめ諸人の往來物ごしに氣を付てゐたる所近郷の武士と見へて器量いみゞく賤しからざる風体の侍二人づれ山崎の八幡へ參詣の下向道堤の小高き所に腰打かけ四方山の物語しけるが藤波が非人と成て耳をそばたて聞ゐたる其ゑらず一人の侍申けるは内〳〵貴殿の重寶せられしあを井下坂といふ刀正銘とあれば切れ物に違ひは有まじ併切れ物と斗心得金味を試ずしてとまさかの時心元なゑなんと其刀て切れ味をためゑてみのへといへばヲ、いのにも仰の通たゞへ干將莫鎔が打たる名劍日本の正宗の名作なり共切れ味あしければ庖丁も同前我らかねて目利をよく致故正銘に違なしと存れ共つみなき者を切てはみられず何共致樣なき事といへば外記工門ァ、それは貴殿心よはし武士たる者は腰に帶する刀が肝要我らも此刀をためさんと存ゑさる非人めをたつた一打扨〳〵見事に切れ申た貴殿も我らが樣に非人でも切てみてあをゐ下坂といふ切れ味をゆらんなされよといへば武右衛門きよつとして扨は貴殿い其刀で非人を切てゝられしか是は近頃むごひせんさくいかに非人なればとて命惜むは同じ事我ゝと得切まいに心强しといひもあへず外記工門何のむごい事が有べき非人と成

たる泥坊なれば飢喝にせまり生てゐては却て迷惑な非人切ころして此世の苦患をすくふてやるが結句慈悲と申物と兩人が咄を聞ゐたる藤波あを井下坂の刀を持てゐるあの侍こそ親の敵にまがひなしとそろり〳〵と菰につゝミし一腰をこひ口くつろげて寄る体を外記工門きつとみてコレ〳〵武右工門殿あれにゐる非人の女め我ゝが咄を聞た故かきよろ〳〵としたつら付ればでつくりと仕たふとり肉參詣の人ももはや薄ふ成片脇へ引ぱつて參り其刀をゆためしなされてゆらんなされまひかといへば武右工門聞ていや〳〵夫はあんまり情なし重ねて成敗に行るゝ死罪の者をやうけてためし見やさん此儀はゆ無用といへ共無法の外記右工門イヤサ其刀が正銘ならば非人ふせいを用捨はよもや有まひ其樣に日をのばさるゝは其刀が心元なひの但は似せ物でござるかとあざ笑へばイヤ是外記殿虚外は死罪のものをたゞしてゆ疑をはらさんエ、殘念なといへば外記工門聞もあへずイヤ〳〵證據なくてはゝ烏乱之夫〳〵家來も家來承るとつゝとよりコリヤヤイ非人め旦那の御用が有るこつちへうせひと用捨も無引立んとずる所を先に進ゑ糸鬢を一とあて當て突飛ば殘る二人が弓手右手をつかみ付を取てなげのけてゝど一世の大事ゞと竹に仕込し一尺八すするりと拔て武右衛門を目がけ壁をかけヤァそれ成侍自こそ春藤孫之進が娘藤波といふ女親の敵にはへが

有ふといふより早く切てかゝる武右衛門肝をつぶしながら扨合て切むすぶ刀の電光上段下段の互のあしらい外記衛門はさよろりくゝん逃支度する内に武右衛門女が切込刀をとび上つて踏落さすかさず大鉈へ引ふせのつかゝれば無念至極と斗にてなみだをながしはがみをなし身もだへするぞ道理なる武右衛門刀もぎ取藤波を引れこきちり打はらひ女ながら天晴のはたらき驚入る樣子聞んと思ふ間もなく切かけられし故せひなくあきらひ兼て此仕合扨某を敵といふて只今の振廻某い高市武右衛門と云者人をあやめし事かつて覺なし何を印に某を敵と云て切かけしぞ子細ていかにといへば藤波聞てされば敵の名もしらず顏もしらねど證據といふは其刀あをゐ下坂と云名作みづからが父の指料其刀を持てゐらるゝからは父の敵にちかひはなひサア尋常に勝負あれといへい扨は此刀を所持せし故親の敵と思はるゝよな然らば其敵は外に有り元此刀は道具や團四郎といふものより買求たれば此刀の出所はしらず其團四郎といふ者が其方の親を討て此刀を奪取某に賣たるや合点ゆかずといへば外記工門も最前藤波が手並に恐れて小腰をかゞめ左樣とは存せず只今のぶ調法宥免あれ追付敵ゐ廻りあひ本望を遂られよと詞と心はうらはらの去りめにかけてコレ〳〵武右衛門殿いさぎ歸りなされまいかと藤波を打詠たる胸内一物ありとは知へゐける武右工門も藤波がそばに寄り此刀を賣たる道具や團四郎を吟味せば其方の敵は分明に知れ申さん某も共々力と成かたきを討せ參らせんと賴もしくいへば藤波聞て女の智惠のはかなさは一度ならず二度ならず敵と思ひ唯今のそさう團四郎と申者はみづからも能存じてゐまする今の御詞に付ても團四郎こそ烏亂者とてもの事に御吟味なされて敵を討せてたび給へといへばホヲ何が扨我らにれゐて如在なし唯今私宅へ同道して歸り何かの樣子も承らんサア御立あれといへばイエ〳〵自か妹磯野と云者此所へ尋ね來る筈兄弟一所に出合申さば御屋敷迄參る事も有べし先天迄は此所はなれがたしといへば武右衛門も力なく然らば妹子一所にて某が宅へ來られよ相待申と禮義をのべ外記衛門と打つれて歸りぬ

四之巻終

第五巻

◎我姿も古ふみせる茶人の才覺

唐土の人母を惡虎にとられ其讎を報せんと彼惡虎をねらひしが虎に似たりし大名を見て弓矢取て打つがひよつ引でひやうどとなちけれは其箭ずなはち巖に立て血を流せしといふも其心の信あるもへ一心の力弓矢に加ふるしる去なりそれにれとらぬ孫之進が娘兄弟親の敵

を討んと思ふ一心の信佛神の應護ありけるにや所〻の災難を安ぬかれて命を全ふせし事誠に敵を討て本望を達せん前表と頼もしく見へぬ斯て掛橋惣右衛門は一旦の義理によつて磯野を伴ひ磯波が行衛を尋けるが團四郎夫婦が物語にて山崎に尋ね來りけるに互にそれとみるよりは走り寄それなるい藤なみ殿か惣右工門殿かいもふと磯野かと久しう程經し互の對面うれしひと床しひと悲しさも打まぜたるたがひの涙もひやられてあはれゐぞ見へし惣右衛門やけるは過し頃石川よりわのれて後そなた樣の行衛を尋ね磯野殿を伴ひて所〻方〻を尋しか共間違ひにて對面せず其中にもそもしの伴身の上にいかなる事もあらんかと案ぜしに京都一貫町に住居せし道具や團四郎方へ尋ね行去にし伴身の事つぶさにうけ給り此所へ參りたり團四郎一旦の惡心にて伴身を害して金をぬすみ取んと致せしが女房がはたらきにて御躰をれとして德松を殺して惡心をひるがへし善心に立歸り夫婦共に道心去て髪を切たる事共をくわしくかたりければ藤波も肝をつぶして扨は左樣にていうや女房小はるなにとなくわらはをもしめいや〳〵れちよといさゑしゆへ子細を聞ず落のびてこの所にゐまりて伴座んすが夫の惡心も〳〵我子をころしてをつからを助けし事扨々情ある女房小はるがふるまひ大節な子をころせしもみづから也〳〵不便の事やと斗にて袖に涙をひたしける惣右衛門

重て申けるは團四郎申せしは敵の徘徊せ去所大方此邊なれば住家は知れね共淀伏見八わた山崎邊に逗留して實否を糺せよと申たれば各兩人は此所をはなれず一ケ月二ケ月樣子を考へ見給ふべし某も付そひて介太刀を致したくは存ずれ共某此所に一所にあらば人の不審のかゝるは必定さあれば本望のさまたげに成事某は是より京都に上り折〻れとづれ申さんと腰にさしたる大小をぬき刀を姉に渡し脇指を妹ゐ渡して其刀の銘は雄狐丸又脇指の銘は雌狐丸と申て天下に無双の打物某が家に傳へし秘藏なれ共兄弟本望を達せらるゝ迄預け申す此大小にて首尾よふ敵を付て不意をとげはされを世上にあらし給へ凡天下をあらそひ國をあらそふ勇士戰場に趣く武士皆名劔の德によつて勝利をは得たるたゑしれはし源家には髪切膝丸平家に小烏唐革いづれもすくれし兵具の德おより天下を掌に治められし事歴然たり去るによつて此大小をれの〳〵に預け申と名劔の德を語りければ兄弟は彼大小をれしいたゞき何から何迄御心づかひ御禮い詞に盡しがたし此づゝれめんつは若殿樣よりいたゞきこれを着て本意を遂歸れと有難ひ御詞今又此大小を我々に預け給ふ事ひとへに正八幡の應護にて首尾よふ敵を討ん事疑ひなくゆと悦びいさめばボヲ、本望遂るい案の中隨分人に心を付敵にめぐり合給へといとせ名して立別れぬ兄弟の刀は惣右工門に渡し件の刀を行

杖に仕こみ兄弟一所に堤のかげに菰をかぶり身をひそめて石のかなわに土瓶をすへて湯を且かしさながら非人のてゐいぢらしく不見へにける去程に加村外記工門い過し頃山崎より下向の道にて女の非人に出合ふ覺を思し上敵をねらふ樣子を聞て私宅へ立歸りけるが日頃我屋しきへ出入する道具屋をよびよせ申けるとて扨も某山崎の八幡へ參り下向の道にて高市武右工門と出合武右衛門がもと発し刀あを井下坂の虛實を正しきやつが、利者顏する鼻をひしがんと思ひ幸片かげに女非人がゐたるをたゞしみよとすゝめしが彼非人めと春藤孫之進といふ者のむすめにて父の敵を討んためとかり事にて似せ非人と成たるとの物語をくゝしく聞て立歸りたり彼あをゐ下坂の刀は汝が手より武右工門に賣たるとかねゞ〳〵聞しがそれか實か但しは似せ物を武右衛門にぬり付たか其譯が聞たい若實のあを井下坂なれば其方をれやの敵とゐふて討ふもしれぬ殊に武右工門が非人の肩をもつて共に敵を見出さんといふたれば其方が身あ疑ひのかゝるは目前但し孫之進を討たる者は外にあつて其方はしらぬ事か有りやうにいふたならば此外記右工門が其方が味方に成て武右工門に手をとらせ非人の女めを討ころして天下にこはひ者のなひ樣にしてやらんと髭をなでまわして人もなけにいひければ彼道具や咄を聞てびつくりし扨〳〵れぼしめしよつて添ひ詞いかにも私元

來は須藤九八とや者ゐて其孫之進を討て刀をうばひ取てい後よもや女の身のさ程には有まひと存せしか共居所を定発ず妻子を持ず爰かしこを經めぐりいもかれらが親の敵とやてつけねらふんかと用心の爲に顏を隱していい高市武右工門殿に賣たる刀は京都の道具や閑四郎とや者をたのゝ某がぬすゝ去刀あを井下坂にまぎれなくい何とぞ旦那の威光あて其女の非人めをかゝり討にいたしたくい仕れふせいは、其刀を武右工門殿方取かへしれまへに進上仕るべし力と成て下さるゝしといひければ外記右工門手を打てさふあらふと思ふた事某が推量にちがはず孫之進を手にかけしは其方よなあぶない事〳〵そふ打明て頼むからは此外記右衛門が味方して非人めを打殺して得させん其かわりに武右衛門が刀を某にアイサ皆迄仰らるゝなそこと我らがぬかりはなひかならず御氣づかひなされまするなフウれもしろい非人めを打殺を方便とかふ〳〵と耳に口をよせてさゝやけば成ほど〳〵のみこみまして御座ります然らば今ばんは暮に參りましよと示し合て旦かれ行跡へ入來る侍は高市武右工門外記右衛門殿御宿にかといひつゝ須藤九八が立歸るをしり目あ見やり門内にたゝずむを見付られてはいかゞそど顏をそむけて足早にこそ歸りける外記右衛門與ゐ立出是と〳〵武右衛門殿よふこそ御出先御通りとあしらへは武右工門はいそがしけにいや用事もあれば

左樣にゆる〳〵致す事におらずそれに付唯今參りしいちと其元へ御無心に參つたる御聞なされて下されふやといへば外記右工門聞てあらたまりたる御口上身あかなひたる御用ならば何事にても承らん御遠慮なしにといへば然らば申て見まする今晩にはかに友傍輩を招き〻調法な茶を振廻んと存る所宵の中殿の御用につゐて登城いたす貴殿内々茶の道に御鍛錬なれば何とぞ御出あり亭主方と御つとめ下さるべし近頃御心安き申事なれ共御頼申度とは此事なりとゐんぎさんに相のぶれば外記右工門聞てハア何事かと存じたれば茶を手傳ひ勝手を見廻申せとの事何より以て御安ひ事ながら今宵は用事に付ちと參らで叶はぬ所ありたまの御用ながら今晩の間には合ますまひ近頃殘念に存るといへば武右衛門殘念顔にて扨は御用にて御他出とやハテ扨それと是非もなし然らば御いとま申ますと式禮して立歸るとかくする中に日も入相に成ければ外記右衛門は一間に入九八が來るを今や〳〵と待ゐたりぬ程なく暮る冬の日の世間の家〳〵も戸をさし頃になれば須藤九八は黒裝束にはうかぶりして外記右衛門が屋敷に來りけるを待もふけたる外記右衛門一間に九八を招き入て其裝束にて人に見とがめられてもいかゝなれば此出立が極上じやと上着をはぬいてみすれば古布子の破れざる物に古きたずさを帶にして古手拭をゐうかぶりにきたれば正眞の非人の姿九

八手を打是いよひ思ひ付哉われらも左樣に致さんと同じくやぶれ着物やぶれ帶をしめて貳尺斗の脇指をぼつこみ家内の者の目を忍び二人づれ立山崎の方へといそぎける

◎因果い車の輪めぐり逢ふ親の敵

さなきだに冬の夜の寒さ堪がたき夜半の頃兄弟の娘は山崎の片はとりゐ唯ふたり寒風に肌を侵し雪霜に身をくるゝめ寒苦をいとはず父の敵を討んと思ひ詰し心の内こそいみじくゆゆしけれ世間の非人とゝ事かいり金銀にとぼしからず飢渇の難ゝなけれ共はまだ手にふれし事もなき朝夕の食のこしらへそれ〳〵の道具をとゝのへる事もなく土瓶に茶を入て兄弟柴薪をひろひてのいとなみ林間酒をあたゝめて紅葉を燒といふ詩の心にいかなひながらあはれにもいたゐ敵ぞれば〳〵ぬかゝる所へ加村外記右工門須藤九八同じく非人のすがたと成そろり〳〵と兄弟の者をうかゞひよりてとつかと座し何んとわいらいこのあたりで見なれぬ乞食なるがどこから來て爰にとゐるそして二人なから女子じやが兄弟か但しは他人か見る通りにいらは男の二人つれそつち男のないが幸仲人いらずにふうふの婚禮盃に此めんつ酒はなけれど此溝川の水を汲て酒のかゝりの水盃肴には精進なれど此田の中に生て有花を當今酒の肴七種の内なれば精進物でもめでたい物サア一つのんでおれにさせ祝言の

盃は女の方から男の方へさすが佐法じやげなこりやこのめんつて〳〵と藤浪が前につき付たる出ばうだひ磯野は見るよりむつとしてコレ〳〵そこな乞食殿こちらいとるか遠國者是なるこ姉様れれこ妹子細あつて非人とは成たれ共いにしへは由有者不作法せば堪忍せぬ外の乞食と思ふたらあてが違ふふと色をかへていひはなせは姉の藤波れとなしやうわコレ妹そりや何事ぃにこへ今非人と成たればむかしの系圖はいらぬと二人に向ひて詞をやはらげわれ〳〵は夫の有身御心ざしいかたじけなけれ共それ斗は料簡といへ共二人は聞入ず何じや二人ながら夫があるとやそりや其夫はどこにゐる有なら爰へ出してそせよかふいひか、つてはいやでもれふても女房にするそつちも二人こつちも二人外に何にもかまひなひ顔ふてもなひ圖な事さあ〳〵ちよつとだき付かとずつとよつて須藤九八藤波にいだき付をふりはなしア、是聊爾な事せまひ夫が有とわゝを立ていひ聞するに聞入のなひ人とやふ歸て下されといへば二人はあざ笑ひ夫が有とぬかすは偽であろコリャやい女二人共に男を持ねば乞食仲間いひ合てどふしたひどい目にあいそふもしれぬ迚も男をもたねばならぬ身なちば此兩人がいふ事を聞て合点すれば外の乞食に指もさゝすてつちやないサアなんと返事はどふじや但しはいやかとしなだれか、ればつきのけはねのけ姉も妹も逃んとするをどこへ〳〵逃しとせぬどあなたへおつかけこなたへれつ詰四人が一度に引ずり合ふ柏子に藤波が懷より小判の數四五十枚はら〳〵と落たりければ金と錢とに目の早い須藤九八小判をとらんとつかみかゝるを藤なみすかさず小判の上にどふと座しかふ顯るる上からは子細をいふて聞さんとつくと聞け乞食の身に此小判ぬすみ物と思ふべきが全くぬすみし金にいあらず我〳〵兄弟はおやの敵をねらふ者ゆへ此姿に成て敵の行衛をまらん爲の用意の金唯今汝ら兩人ふ此金をとらし度けれ共此金がなふては木望がとげられず了簡して見のがしてくれよわれ〳〵が身の上を必他言ばしまてくれなといふを聞て須藤九八扨こそと思ひフウ扨は親の敵を討ん爲其姿に成たといふかチ、いかにも其通り然らば其敵の名と何んといふ者じやとこへばされば敵の名をまつたれば討にも討やすけれ共何をいふても名をしらねば手がゝりもない事と云を打けき外記右工門マアあまひ事ぬかすまひ其金いぬすみ物なれ共我々に見付られせふ事なさに敵討といふたらば見のがしにもせふかと當座のぬけ口扨〳〵肝のふとひ女めどふて人あてろさるるれのれらが命今爰でばらしてくれんとつか〳〵と立よる所を藤波磯野諸共に竹に仕こみし件の刀一度にするりとぬきはなして身構へし事を分ていひ聞するを承引せす慮外せばゆるさぬぞと氣色ばふて立たる有樣目あいみれ共音に聞

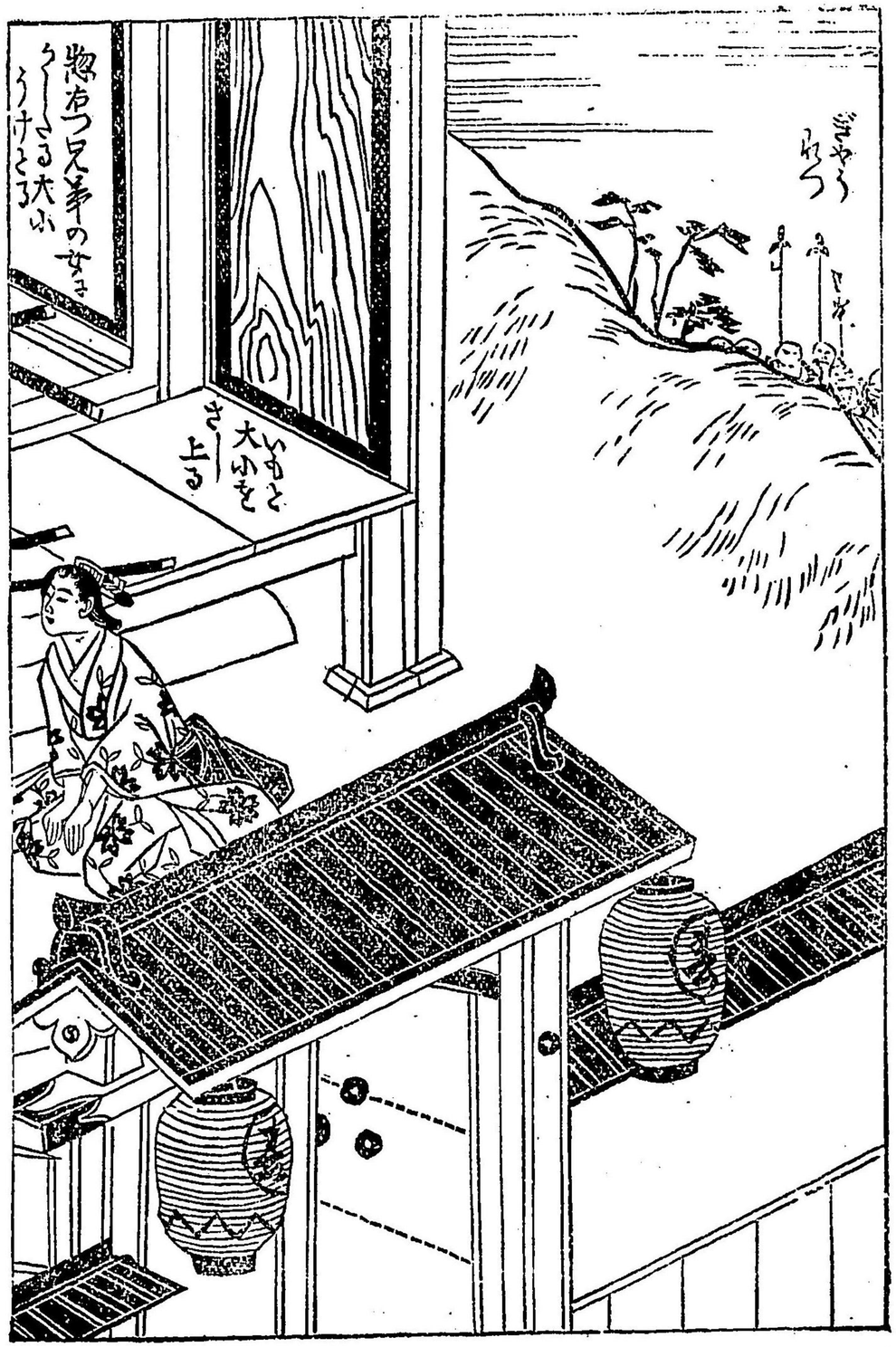
し木曾殿に使へしともへといへる女にもれとりいせドと見へにける九八わざ笑ひ扨くゝ去ほらしひ女め某を誰とかれもふれのれが親孫之進を手にかけて討て捨た須藤九八といふ男何ほどれのれらがはたらけばとて女の身をもつて手に及ぶ九八ならず今あふさは天のあたへれのれらを討ころして親が冥途の供をさせんかくご仕れとはふよりはやく藤波兄弟鉢巻をめて立上り扨は汝は須藤九八といふ我々が敵よな此年月心を尽し付わらふ親の敵始てあふたる嬉しやと天を禮玄地を拜し兄弟もろ共刀をぬひて聲をかけャァいかに須藤九八春藤孫之進が娘藤波同玄く磯野兄弟親の敵のがさぬとじりくとつめよすればャァ女のさまでのがさぬとしやらくさし兄弟共にくはんねん仕れとてもの事になぶりころしにしてくれんとぬき打に丁と切を身をひねつて切付れは九八が肩さきずつはと切こむ其拍子ふ藤波がよはごしを五六すゑど切さげたり外記右衛門も刀をぬいて切てかゝるを妹の磯野立へだて切はらへばャァじやまな女め唯一打とたんぴら物をひらめかし女と思ひあなどつてなぐりたつれは事共せず切むすびうけながし手をつくゑて切合へは外記右衛門も薄手を負ひ磯野も手ををひ双方眼に血と入たり四人が四方に立別れ切つきられついどみあふ修羅のちまたもかくやらんめざましかりし有様とかくる所へ乞食一人はうかぶりしてれどり出物

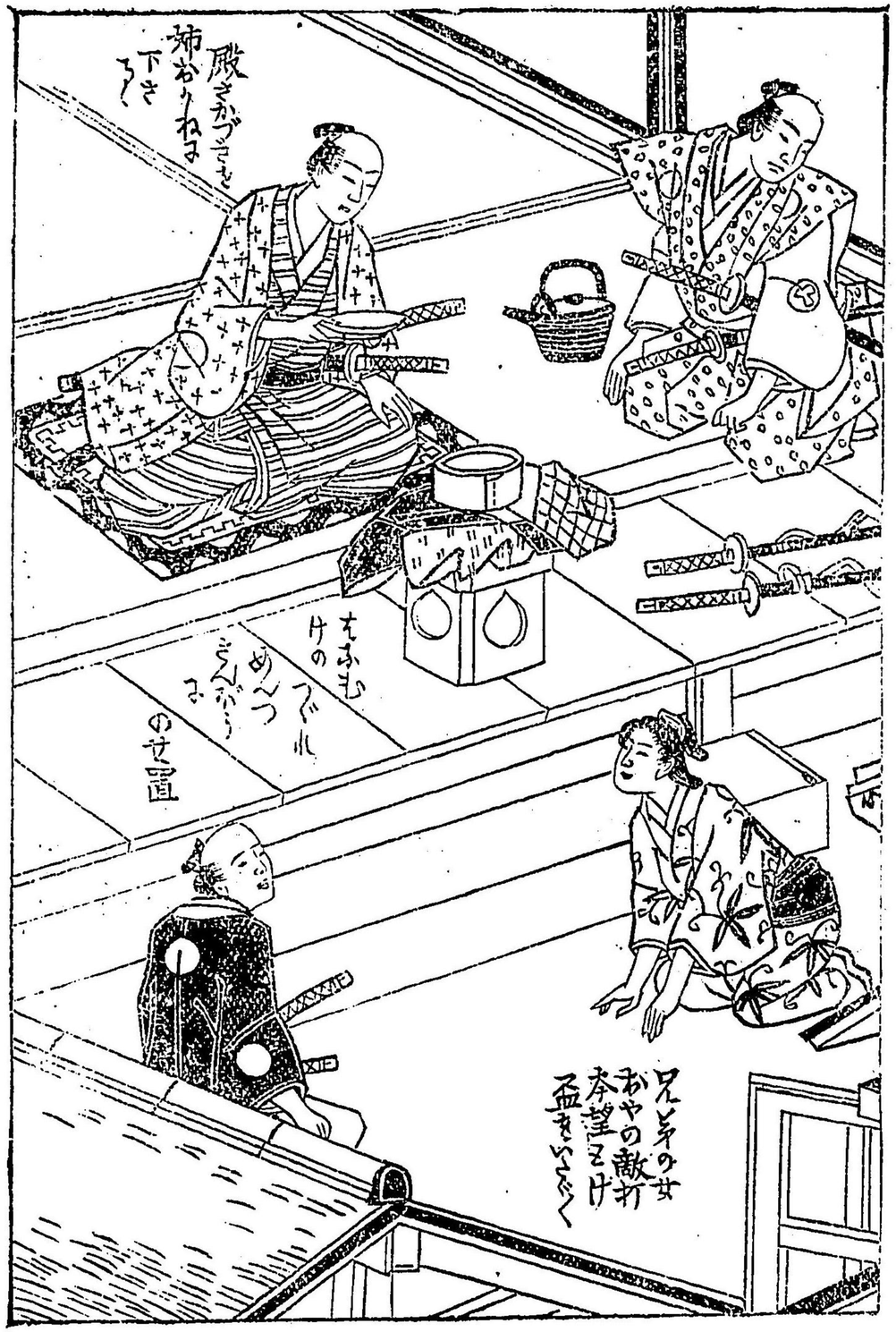
をもれはず外記右衛門をばひつかづひて投とばせば外記右衛門い肝をつぶして實なき者のならひ九八を助けんとする心もなく跡をもみずして逃失ける件の乞食外記右工門には目もつけずはしりかゝつて須藤九八がぬいたる刀を踏落してとつてれさへてはうかぶりを取すつれば兄弟は何者なるぞと顔をみれば頃日淀堤にて逢し高市武右衛門と藤波驚きそこもとは先頃の御侍高市武右衛門殿にてはなくいや何也へ此所へ來りかゝるなされかた合点參らずといひければヲヽ合点ゆかぬは尤く先日始て各々の御目にかゝりやうすを聞て驚き入何とぞ敵をれの〳〵の手あかけ討せて進せたくれもひかの刀を賣し道具や團四郎を吟味いたせ共夫婦共世を捨て隱遁の身となり行衛も知ずと承りし故いかゞはせんと思ふ所に某が傍輩加村外記右工門是成須藤九八と何か内證の密談不審に思ひ立聞し樣子を承るに今宵此所へ參りれの〳〵兄弟を返り討にせんといふ二人が談合扨はとれどろき其邪厂をせん爲に俄に珍客を拵へ茶の湯に事をよせて外記右衛門を某が宅へ招き今宵の企をやめさせんと思ひしに外記右工門承引せず用事と偽りて某をあざむき此所へをしかけれの〳〵を返り討にせんとの心底を見極し故ふの〳〵は女の身きやつらがたくみに落て本意を遂ずあたら兄弟を殺させん事の残念さに同し非人の躰に出立て來りしが思ひの外のふの〳〵の働き

去ながら今少おそく來らばあぶなひ事〳〵此男こそ各の親の敵須藤九八といふ奴サア立よつて首をうち年來の鬱懷をはらされよと須藤九八を押へながら始め終を物語れば兄弟はアット斗御心ざしの程の忝なさよとてもの事に其九八を立合の勝負が致し度ひといひければヲヽ是も尤然ちは勝負せられよと押へたる九八を取て引立つきいなせば兄弟一度に切てかゝれ共須藤九八は武右衛門が後詰に氣をのまれうろつく所を姉の藤波ねがみ打に切さくればたゞさに切こまれ二つに成てわかれ死ず磯野もかけ寄れどう上り飛上りずた〳〵に切さいなみ年頃つもりし心の闇今日唯今はれたりと悦びいさむ斗なり武右衛門兄弟に打むかい此上は片時もはやく本國へ歸られよ某方より屆申さんといへば兄弟も今は是迄片時もはやく歸國仕り主人に此事申上一家の者にも悦ばせんと九八が首を絹につゝみて三人打つれ立歸る所へ掛橋惣右衛門何心なく見廻に來りしが八々に出合右の事共を聞て大に悦び武右衛門に一禮のべ某同道仕り本國へ送り申べし是迄の御恩忝さ猶國本より御禮い申上べ去兄弟共に手を負たれば歩行にては心元なさと山崎の民家をたのみて駕籠にのせ大和の國へ立歸り去は心地よくど見へける

◎殿樣の御褒美は身を捨て浮む瀬の盃

時去り時來りて今年目出度春の頃大和國奥村式部卿の方へかれ〳〵いひ名付ありし濱名の大守より姫君をよび迎へ給ひ若殿の御名縫殿之助を改られ式部卿と申て家中の喜悦御家繁昌千秋万歳の御祝詞を申上んと番頭幡頭をはじめとして其外物頭組頭足輕等に至る迄御扶持を得し茶道醫者儒者出家俳諧師連歌の宗醫町〳〵の庄屋年寄麻上下の折目正しく大手の御門に群集せしは目出度かりける粧ひなり御取次の侍逐一に披露してそれ〳〵に御祝義を相のべて私宅〳〵に立歸る折から來る旦掛惣右工門孫之進が娘兄弟藤波磯野を伴ひ立歸り敵須藤九八に出合首尾よく本望を遂首を取て罷歸るよし披露有ければ若殿御悦喜ありて御前へめされ御有けるい女の身として名をも知らぬ敵を早速に討取立歸る事神妙なりと御褒美の御詞御盃を下されける幷ゐたる家中の面々も兄弟が孝心の程をかんじあへる事去ばらく鳴もやまざりける藤なみやけるは此度有難も殿樣より下し置れしめんつと破れし衣類を着し非人ど成り所々方々をさまよひ河内にての事共且又京都の一貫町みての事を委しく語りかゝるあやうき難をのがれしもひとへに殿樣の御手を下されし此つゞれとめんつの御影にて本意をとげ有難く存じ奉るよしを申上れば若殿仰けるは尤某此つゞれめんつをもつて二度本國に立歸り今此大和の一城主となりし吉事をいいひて汝ら兄弟にと


ぎやうろ
惣市つ兄弟の女
うしさる大小
うけとる
いもと
大小を
さし
上る


殿さかづきを
姉おりねる
下さる
ちふもけの
ぐるめつ
ぐるみ
の女置
兄と弟の女
おやの敵打
本望とげ
孟きいさぐく

らするといへ共淡らが心に信なく孝心なくんば何とて年月の寒苦をしのぎかく本望を遂べきや此度の褒美として孫之進が知行元のごとく宛行ふべし幸山城國横佩の家中小鹽辨次郎には未だ定る妻もなく殊さら兼〳〵心をかけたと聞ば某仲人して辨次郎方へ嫁入を取結んとの仰下地は好なり御意はよし殘る方なき仰のかず〳〵藤なみは悦び涙殿の御恩の有難さよと御前にひれふす斗こ藤波重て申けるは是に扣へ羅ある侍は濱名の御家子に掛樣惣右衛門と申人にてゝが不慮の事にて出合互に名乘合主人と主人今聟舅の緣を御結なされたれば家中の身へ傍輩も同前と我〳〵をいたはりあまつさへ家の重寶雄狐丸雌狐丸の二振の大小をわれ〳〵兄弟にあづけられてゝ則右の刀にて敵須藤九八を次袈裟に切てゝにあたかも豆腐を切よりやすく二つに成てゝと言上あれば縫殿助聞給ひ扨は汝と濱名の家來掛稲惣右衛門よな日頃の武勇聞及びたり殊に某過つる頃都四條川原にてつれそひしは其方が妹なりきが人しれず殺されたりと聞き故敵を討て妹れかねがきゆらの盲熱をはらさんと思へ共何者の仕わざ共しれざるもへ今迄は延引せり此度藤なみ兄弟が先途を見屆け殊さら重代の名作雄狐丸雌狐丸の二ふりをかれらに得させつる心底あつぱれ頼もきさ勇士かな去る頃より濱名の城主の勘氣を得て牢人せし譯を聞ばあながち其方が過りならず輩傍の讒による

者なり某今濱名の城主と一家と成たればよろしく中直きて得さすべしと仰げれば惣右工門承り忝き仰違背申にてはなくゝが得共某牢人せしは君の非をいさめて諫爭のとがめを蒙りての事にてゝへば只今にて某が申上るを聞入あらば始のごとく給仕奉公仕るべしもし聞入なくゝは〻牢人して主人を持ず安閑に暮すこそ某が願ひにてゝ又藤波兄弟が先途を見屆しは一つには主人と緣有縫殿助樣の後家來孫之進殿の娘と知たるゆへ當家へ忠義をつくすは主人へ忠義を尽すも同前と存じまつたく牢人いたきゝても主〻の事をれろそかに存せぬ證據にてゝ二つには某が妹おかねをころせしを何者かと存るゆへ方便をもつて承るに藤なみ兄弟が敵と覘ふ須藤九八は妹をころし金をうばひとり行衛なくなりたるよし其時の乞食仲間を吟味いたし白狀させてゝゆへ彼須藤九八といふ名を證據にいもとか敵をたづぬる折から此兄弟もおやの敵をたづねらるゝにより見捨難く共に力をそへしに程なく八わた山崎の邊にてれやの敵をしゆびよく討取られし敵の名をとへば須藤九八某が妹の敵も須藤九八わて某兄弟を介抱しと須藤九八を討せしゝ妹の敵を某が手にて討たるも同前殊に某が指料の大小にて姉ゝ刀いもとは脇指にて須藤九八を切たるは兄の人々に預けよとの天の告此上に思ひのこす事もなくゝへ其此二ふりの大小と某が持て益なひ事主人へ指上奉

るべしと相述れば繼殿之助はなはだかんじ入給ひて詞といひ心といひ言行そろひし勇士それがし宜しく取膳ん今より妹磯野を汝がむすめとして養ひそだてゝ永くれや子の緣をむすび本國へ下向すべしと御暇を給いりければ藤なみ兄弟は須藤九八が首を父孫之進が廟前にそなへん冥途のまよひをはらさせよと仰にしたがひ悅びて御前をたつていそぎ菩提所へとれるむさ孝心の譽を世上にあらはし惣右門は二度舊主の錄をたまはり武名をかゝやかし主人の非をあらためたゝしき道をれてなはしめ雄狐丸雌ぎつね丸の二ふりは濱名の家につたへて代々の重寶とせり國を治め天下を平均にするもひとへに武德名劒の印勳善惡惡のれきて正しき御代の春こそ目出度けれ

寛保二年戌正月吉日

女非人綴錦五之卷大尾

名著集自第一卷至二十四卷目次

●第一卷
後醍醐月氷奇緣　完　曲亭馬琴著
小春治兵衛花廼島臺　完　松亭金水著

●第二卷
碗久松山柳巷話說　完　曲亭馬琴著
大津土產吃又平名畫助刀　完　式亭三馬著
邂逅物語　完　天步子著
湘中八雄傳　完　北壺游著

●第三卷
吾妻餘五郎雙蝶記　完　山東京傳著
淺間ヶ嶽面影草紙　完　柳亭種彥著

●第四卷
淺間ヶ嶽后編逢州執著譚　完　柳亭種彥著
怪談雨夜の鐘　完　十返舍一九著
夕霧曾替文章　完　栗杖亭鬼卵著

●第五卷
艷廓通覽　完　洞羅山人著
貞操美談園の花　完　爲永春水著

●第六卷
恩愛二葉草　完　鼻山人著

小夜の中山石盲遺響　完　曲亭馬琴著

●第七卷
飛彈匠物語　完　六樹園著
邯鄲諸國物語近江の卷　完　柳亭種彥著
五色の糸屑出羽の卷　完　峨眉山人著

●第八卷
三十三間堂棟材奇傳柳の糸　完　小枝繁著
花暦封じ文　完　朧月亭有人著

●第九卷
新異解脫物語　完　曲亭馬琴著
於三幕平宗傳暦　完　ちぬ平魚著

●第十卷
邯鄲諸國物語大和卷　完　柳亭種彥著
胸算用(大晦日八一日千金)　完　井原西鶴著

●第十一卷
昔語稻妻表紙　完　山東京傳著
姫萬兩長者廼鉢木　完　曲亭馬琴著

●第十二卷
糸櫻春蝶奇緣　完　曲亭馬琴著

●第十三卷
邯鄲諸國物語播磨卷　完　柳亭種彦著
記錄曾我女黑舟　完　江島屋其碩八文字屋自笑著
●第十四卷
蹇廼復讐戀の宇喜身玉簪子　完　松亭金水著
●第十五卷
邯鄲諸國物語伊勢の卷　完　笠亭仙果著
邯鄲諸國物語遠江の卷　完　笠亭仙果著
怪談登志男　完　愚雪舍素及子著
●第十六卷
佐野常世物語　完　曲亭馬琴著
小說浮牡丹全傳　完　山東京傳著
痴漢三人傳　完　咸和亭鬼武著
●第十七卷
俊德麻呂諸曲演義　完　振鷺亭著
繪本運理の片袖　完　十返舍一九著
●第十八卷
涙手摺昔木偶　完　柳亭種彦著
異國奇談和莊兵衛　完　遊谷子著
●第十九卷
常夏双紙　完　曲亭馬琴著
櫻姫曙双紙　完　山東京傳著
●第二十卷
忠臣水滸傳　完　山東京傳著
●第廿一卷
大晦日曙草紙　完　山東京傳著
化競丑滿の鐘　完　曲亭馬琴著
●第廿二卷
已惚鏡　完　式亭三馬著
三七全傳楠柯夢　完　曲亭馬琴著
●第廿三卷
孝子嫩物語　完　高井蘭山著
春色淀の曙　完　松亭金水著
●第廿四卷
菊の井草紙　完　爲永春水著
會稽松の雪　完　戯洋堂著

但シ壹冊定價金五錢全部廿四冊代價金壹圓但シ壹冊ニ付郵稅金貳錢ヅヽ

發行所　礫川出版會社

溫古小說發行目次

高砂大島臺　其碩自笑著　正價金五錢
世間手代氣質　其碩著　正價金五錢
歲德五葉松　其碩瑞笑著　正價金五錢
女非人綴錦　自笑其笑著　正價金五錢
武道近江八景　其碩著　正價金五錢
出世握虎昔物語　自笑其碩著　正價金五錢
那智御山手管瀧　其碩自笑著　正價金五錢
珍術罌粟散國　其鳳著　正價金五錢
元祿太平記　梅園堂著　正價金五錢
咲分五人媳　其碩著　正價金五錢
熊谷女編笠　錦文濟著　正價金五錢
風流菊水卷　其樂齊著　正價金五錢
俄仙人戲言日記　閑鵝齊著　正價金五錢
彩色歌相撲　其笑瑞笑著　正價金五錢

斗2L68

大正二十五年三月十五日印刷出版

編輯者　故　其碩、瑞笑、
飜刻兼發行者　足立庚吉　東京市小石川區指ヶ谷町十七番地
印刷者　小林由造　東京市小石川區掃除町三十三番地

發行所　小石川區掃除町三十三番地　礫川出版會社

關西販賣所　大坂市心齋橋北詰　競爭屋本店

大販賣所

日本橋區本石町二丁目　上田屋本店　京橋區尾張町　東海道雜誌店
神田區裏神保町　上田屋支店　日本橋區小網町　信文堂雜誌店
淺草區三好町　大川屋書店　京橋區彌左衛門町　嚴々堂雜誌店
日本橋區通四丁目　金櫻堂書店　日本橋區鍜冶町　指金堂雜誌店
神田區錦町一丁目　武藏屋書店　神田區錦町三丁目三番地　井上藤吉
本郷區元富士町　解明堂

右之外日本全國各書林雜誌店ニ於テ取次販賣仕候

913.52
H3310

温古小説
女非人綴錦

国立国会図書館

089262-000-6

913.52-H3310

女非人綴錦

八文字屋自笑
八文字屋其笑／著

M25

DBM-0574